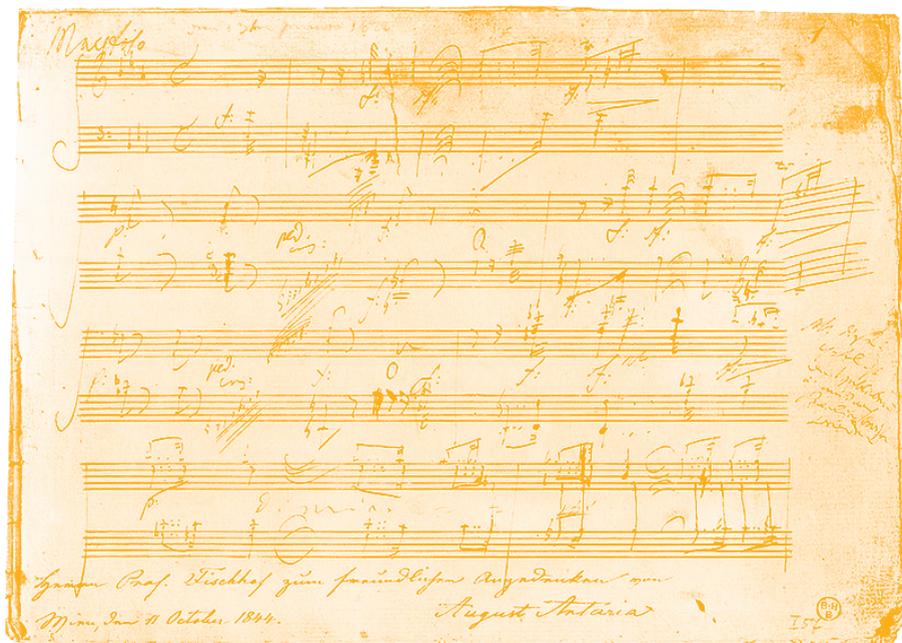


ユニテ 2021.5

48



表紙 ベートーヴェン最後のピアノソナタ、第32番第1楽章冒頭部の
自筆譜 1822年（ボンのベートーヴェン・ハウス蔵）

目次

「ベートーヴェンの生涯」より	ロマン・ロラン 片山 敏彦 訳	1
ベートーヴェンへの感謝	ロマン・ロラン 片山 敏彦 訳	2
ベートーヴェン、最後の三つのピアノソナタ	杉田 谷道	18
ベートーヴェンで死ぬことについて	濱田 陽	21
ピアノとベートーヴェン	園田 高弘	27
『ジャン・クリストフ物語』朗読会（二〇二〇年一〇月二五日）	朗読 村田 まち子	37
あけぼの Ⅲー二 ゴットフリート	朗読 村田 まち子	37
『ジャン・クリストフ物語』を読んで	金剛 育子	45
万人に抗して	植松 晃一	48
——ロマン・ロランとアメデ・デュノワ	植松 晃一	48
天狼を悼む	西垣 正信	56
——フー・ツォン追悼	西垣 正信	56

ロマン・ロラン研究所便り

新役員一覧	58
短信	59
読書会報告 寄贈図書	60
訃報	61
研究所設立趣意書	62
研究所の活動	63
二〇二〇年度 賛助会員、寄付者名簿	71
編集後記	72

「ベートーヴェンの生涯」より

ロマン・ロラン

片山 敏彦 訳

空気はわれらの周りに重い。旧い西欧は、毒された重苦しい雰囲気の中で麻痺する。偉大さのない物質主義が人々の考えにのしかかり、諸政府と諸個人との行為を束縛する。世界が、その分別臭くてさもししい利己主義に浸って窒息して死にかかっている。世界の息がつかまる。——もう一度窓を開けよう。広い大気を流れ込ませよう。英雄たちの息吹を吸おうではないか。

生活はきびしい。魂の凡庸さに自己を委ねない人々にとっては、生活は日毎の苦闘である。そしてきわめてしばしばそれは、偉大さも幸福もなく孤独と沈黙との中に戦われている憂鬱なたたかいである。貧と、厳しい家事の心配と、精力がいたずらに費える、ばかばかしくやりきれない仕事に押しつけられて、希望もなく悦びの光線もない多数の人々は互いに孤立して生き、自分の同胞たちに手を差し伸べることの慰めをさえ持っていない。その同胞たちも彼らを識らず、彼らもまたその同胞たちを識らない。彼らはただ自分だけを当てにするほかはない。そして最も強い人々といえども、その苦悩の下に挫折するような瞬間があるのである。彼らは一つの救いを、一人の友を呼んでいる。

〔「ベートーヴェンの生涯」(『ロマン・ロラン全集14』みすず書房、一九八一年)冒頭文より〕

ベートーヴェンへの感謝¹⁾

ロマン・ロラン

片山 敏彦 訳

われわれの生活の偉大な伴侶であつてくれたその人に、私はこの一時代の感謝の言葉を——感謝の歌をささげる。^{ダンクゲザンゲ}
われわれの幼い時からこの方、彼がいかにわれわれのために友であり、助言者であり、慰め手であつてくれたかは、私はそれを間に合わせの貧弱な言葉ではどうもい言いあらわすことができない。けれどもあなたの方——みずからそれを経験されたあなた方は、私同様にそのことを知つていられる。私の言葉を聴いていられる方々の多くは、ベートーヴェンに助力を負うていられる。多くの方々は、試煉の時に當つてベートーヴェンに助けを求め、力強い親切な魂の中で、苦悩の和らぎと生きる勇氣とを汲み採られて来たのであつた。

ここで私が言いたいと思うことは、われわれ、あらゆる国々のわれわれを、この世で彼の生涯の後につづく世紀に生きたわれわれを、彼がいかに征服したかというそのことである。それはまさに彼が、ゲーテの次の言葉を彼自身の言葉として適用した日に予見していたとおりのことなのである。

「私が私の同時代者たちから受けなければならなかつた不当の損失の代償を、この次の時代、又その次の時代が二度か三度支払つてくれることだろう……」²⁾

(1) この文章はベートーヴェン百年祭のために、一九二七年二月二八日にウィーンでロマン・ロランが朗読したものである。

(2) 『西東詩篇』のゲーテの序文。——ベートーヴェンは自分の持つていた本のこの部分にアンダーラインをしていた。又それを彼

の手帖に書き抜きました。

思うにあらゆる征服の中で精神による征服ほど貴いものはない。そうして精神の領域の中で、音楽による征服ほど深く且つ遠く及ぶものはない。

一つの有名な対話の中で、ベートーヴェンは次のようなことを言った――

«Musik ist die Vermittlung des geistigen Lebens zum Sinnlichen.»

(音楽は精神生活を感じ覚生活へ媒介するものである)

われわれが偉大な音楽家の思想の中へ透入するのは感覚によってである。その思想の意味しているところのものをわれわれが会得する以前に、まずそれはわれわれの肉に滲み込む。そういう思想が女や子供の魂のような柔順な魂をいつのまにか薫陶するのは、じつにそのような至高の魔術によってなのである。

無数の若いヨーロッパ人の魂を、いかにベートーヴェンの音楽が鍛えたかということ、私は諸君に示してみたいと思う。そうして、諸君の前で私自身の思い出に遡りつつ、彼がわれわれの本質の奥底に浸徹し、そこに彼の精神と彼の意志との力強いしるしを刻みつけたところの、その神秘的な道筋を見出すことを試みてみようと思う。

ベートーヴェンの音楽についての私のもっとも古い二つの思い出、私の最初の彼との邂逅というものはこうである。八月のある静かな日の午後、スイスの或る伽藍カテドラルの中で聴いた『田園交響曲』。戸外の小鳥たちのびよびよが、オーケストラの鳥たちの声と入りまじっていた。その以前にこの音楽のことを、私はまったく知らなかった。そうして一瞬間の後には、それが音楽だということをさえ私はもう忘れてしまっていた。まるで夏というものがそこへすっかりはいり込んで来ているような気がした。私は、太陽に照らされた自然のざわめく夢想の中にひたつて恍惚としていた……

二度目はパリの劇場である。息苦しい、光線の通りの悪い、たいそう上の方の座席で、幽暗な熱っぽい情熱の渦の流れている込み合った群集の中でのことである。演奏されたのはイ長調交響曲（第七）、それはまだ私の知らないものだった……沈黙……最初の音が鳴り出すと、もう私は一つの森の中にいた。始まりの大きい和音の上にオーボエとクラリネットとがそのゆるやかな夢想を繰りひろげ、転調の影がそこをよぎる。ピアノシモ（最弱音）で弦の顫えが高まる。これこそ森である。——動揺する森、やがてまた堂々と瞑想の主題を取り戻す森である。中ほどで森の中の空地のような小さな空間が田舎風のオーボエで作られる。そこで和らげられた魂が歌う。森の莊重なささやきとその巨大な呼吸とがそれを包んでいる。その呼吸は高まり、また落ち入る。一つの休止。耳はそばだつ。こだまの中の応え。森の中の呼びかけ。オーケストラのシンバルの交互に促すような調子。——いつさいが待ち受けている。いつさいが飛躍の準備をする……すると見よ！ アナペスチック（短々長音格）のリズム。舞踏。初めは小さな裝飾音とグルペット（短連符）とを持った田舎風の優雅さで、やさしく静かである。少しずつ、全体が動揺する。魂のあらゆる色合い。憂鬱。不安な荒々しい力。樹の葉の中の風の顫動。誇らしい喇叭乱吹。全体が少しずつ、少しずつ勢いの中へ引込まれる。ロンドはアレグロの第二の部分で次第次第に、よそよそしい、急激な、きびしい、悩ますような、慌しい、憑かれたような性質を帯びて来る。——やがてそれにつづく異常な終節、あの神秘的なピアノシモ、あの影の深淵。その上に幅びる光が落ち、そこから巨人的な力が立ちのぼる。その主題は大きくて反覆的で、衝角のように投げ飛ばされ、石の切れっぱしのように、空にかかった物体のように、飛翔の途中で止められる。——そして最後に、息をはずませているフォルテシモ（最強音）。民衆の激烈な舞踏。それは騎馬行の中で終りを告げる。

この二つの交響曲のなかで、共に二つの場合を支配する一つの印象は、自然（la Nature）——野または森、太陽もしくは夜——と、そしてその自然に同化してその諸力に味方し、その顫動と、その法則と、そのリズムと、その本質との材料を用いて、崇高な戯れを織りなすところの精霊（l'Esprit）とである。完全に現実を把握しきっていることと、

夢 (Le Reve) へのその転質とである。その夢は衣の下で宇宙の本質の核心に徹したが故に、現実よりも更に真シエである……

そうだ、今こそこのことが私にははつきりわかる。——だが、あの時、あれを聴きながら、私はどこにいたのか？ 子供の私の魂はどこにいたのか？ 意志も持てず、息もつけず、あの幻想の神聖な旋風に運び去られていたのか？……私がそこへ沈み込んでいた忘我の状態の中で、自分の心の中に形成されつつある事柄を、私はまだ少しも辨别することができなかった。後になって初めてそれが判って来た。今日、私にはそれがよく判る。それを明らかに読みとることができるところまで来着いたと信じる。そうして、私がここで自分の子供の時の印象を呼び戻すのは、諸君自身の印象をそれぞれ諸君が読みとることを、おそらくそれによって助力することができるかと思うからである。思うにわれわれは皆同一の人間であって、ただ意識の強さと明らかさとの度合いを異にするだけのことだから。

まず、ベートーヴェンの音楽の中で私の心を打つところのものは、こうである。——

総じて音楽はその選ばれた人々の作品にあつては、一つの思念イデーへの集中力を展開させている。それは動き行く建築であつて、そのあらゆる部分がいちどきに聴き取られねばならない。——けれどもベートーヴェンの音楽におけるほど思想のこの統合力が強烈で不断で、又とらえがたいことは、他のどんな音楽家の場合にもないことである。それこそ彼の同時代のあらゆる音楽家たちから彼を区別する本質的な特質だとすれば、それは統一への非凡な欲求によるところのものであつて、彼のあらゆる作品がそのしるしを帯びているのである。彼の大きい作品の或るものの中に——全体が同一のモチーフの上に建てられている『ハ調のミサ』の中に、人がそれを気づいたのもうずっと以前からのことである。彼の生前から、直覚的なホフマン (E. T. A. Hoffmann) はハ短調交響曲『第五』のあらゆる主要旋律が、互いに緊密な血族關係を持っていることに驚かされていた。今や、最近の研究者たちの或る人々は「彼の各々の作品がそのあらゆる作、あらゆる部分、あらゆる主要旋律において、ただ一つの動機モチフの変奏である」という法則を、彼の

作品全部について帰結しようと望むにいたっている。この法則が彼の作品全部に適用されるか（私はそれを極端に過ぎると思うが）どうかはとにかくとして、彼の全作品が、同一の鉄の意志をしるしづけていることには議論の余地がない。恐るべき集中力をもつて一つの思念イデーの中に沈潜している人間をわれわれは感じる。そしてこれはどんな外界の響きもはやそれを乱そうとはしなかったところの聾のために、彼のうちに閉じ込められていたところの孤独なる者の仕業しわざのみではないのである。（そうも考えられはするが。）確かに聾になる前にもそういう特徴は現われていた。青年時代の作以来、一七九一年のピアノ、ヴァイオリン及びセロのための三重奏トリオ以来、同一の主題が各々の作を通じて取り扱われ、変形されていることが、サンフォワ（G. de Saint-Fois）氏の最近の発見によつて示されている。これは天性的な傾向である。子供の時からベートーヴェンは——それは年と共に次第次第に増進したが——自己のうちに沈潜し、また彼の音楽を聞く人々をも彼の内部の幻視ワッソルンの中に——肉体でもあれば同時に精神でもあるところの、あの眼なき幻視ワッソルンの中に——引きずり込んだ。思念イデーが突然、道の上や散歩や会話の最中に彼を襲うと、彼は（彼及び彼の近い人々が言ったように）忘我状態（trance）になった。もう自分が自分には属さず、思念イデーの所有ものとなった。そして彼は、そのイデーを所有しないうちはそれを逃さなかった。何ものといえども、彼の追求を思い止まらせはしなかった。彼はベッティーナ・ブレンターノに、胸に迫る言葉で述べている。（私は、これは信頼の置けるものだと思う。なぜなら、この言葉の調子は彼の性格について知っているわれわれの知識へ適合するものだから。）

- (一) ヴァルター・エンゲルスマン氏の透徹せる論文 Die Sonatenform Beethovens. Das Gesetz (Die Musik. XVII. Jahrg. Heft 6.) 及び Die Sonatenform Beethovens dargestellt in der 5. Sinfonie (Dresden Anzeiger. Wissenschaftliche Beilage. I u. 8. Februar 1927) を参照。
(二) ベッティーナは彼女自身の raptus に憑かれていた。彼女はベートーヴェンの天才の下意識的なものを読みとる素質を生れつき持っていた。

近日、私はベッティーナの心理的な問題を調べてみるつもりである——新しく発表された記録のお陰で、今ようやくそれは解明されることのできるものとなった。

「……私はそれ（イデー）を追跡してつかまえる。すると、そいつが私から逃れて、沸騰している塊の中に消え去るのを見る。再び熱意をふるい興して、それをもう一度とらえる。私はもう、どうしてもそれから離れることができないのです。恍惚の痙攣の中で、それを私はあらゆる変調に多様化しなければならぬ……」このような熱狂的追跡と、捕獲され、制御され馴らされたイデーのこのような多様化（multiplication）と——（それらは聴く者にリズムの鉄槌打と幻覚に憑かれた反覆と、そしてオーケストラの色づけ及び転調の肉感的燃焼とを威圧的に与える）——それらは、自己をゆだねる素朴な、真実な、精神及び感覚に対しては、催眠的な効果で、西洋風な瑜珈を惹き起すのである。インドの瑜珈と同じに、一度それに触れたものは歩くにも話すにも働くにも、日常生活のあらゆる動きの中に、それを自分の身につけることになる。それは地下層の中に生きる。皮下に注射された香油のようなものである。われわれの思想の血液はベートーヴェンの血球を流す河である。

これは第一の段階であり、盲目的獲得の獲物である。第二は、われわれを獲得する巨匠を発見すること、われわれの裡にはいり込んで来た力を発見すること、これである。ベートーヴェンに比べては、他のいかなる音楽家も、蓄積しまた投げ与えることのなかったところの前代未聞のエネルギー。それは自然の一要素であり、大滝をなして奔流する流れである。それは精神を引き浚い、それは肉体を活気づける。轟く水門が情熱の潮のために破られる時、私は自分思わず立ち上って叫び出さないうためには、自分の小さな腰掛の舷にじっと自分を制して押さえつけていなければならなかった。——それは、例えば『エロイカ』の終曲の勇躍、『第九交響曲』の、時ならぬ叫喚を伴うテノールの歌や行進曲、『コリオラン』序曲の憤激の爆發、『エグモント序曲』の終りの解放された群集の雀躍、猛烈なクレッシェンド（漸次強音）、また『第五交響曲』のスケルツォから流れ出てフィナーレの中に落ち込むところの眩暈のする潮流もしくは『レオノーレ』第二、第三の序曲の疾駆する終末の流れを聴いた時に。……私はここでは幾つかの滝つ瀬を思い起すにとどめよう。けれどもこのような奔湍は、ベートーヴェンのもの中にはいたるところにある。それは、

時には積み放たれ、時には圧搾されている。例えば、私が今あげた『コロオラン』のあの大きい和音^{アコード}では、このことが代る代る起つてくるのである。それは行進する音楽、襲撃の歩調で疾駆する音楽である。ユーリウス・ベネディクトが国中を走り廻るリア王に譬えたところのその人——彼自身が言つたように、外気の中を「散歩しつゝ作曲した」(spazierend dichtet)ところのその人がなんとよく、そこに認めらることか！ インキ壺からひつ張り出されるところの、閉された窓の中での音楽の類は、そこには少しもない。自分で自分の身体を聴診し、自分の夢の中で麻痺してしまふような姑息な音楽の類は、そこにはまるでない！ ベートーヴェンの音楽は大気を呼吸して前進する。そして大気を呼吸させ、前進させる。そのために彼の音楽は、私が前に挙げたあの種の催眠術、あのヨーガの幻惑に対して幸福な対蹠作用を行うのである。それは、実行のヨーガ、真正なヨーロッパのヨーガ、男性的な靈妙な力を伴つてはたらくところの夢想である。そうして、なによりもまずそれは健全である。すばらしく健全である。それは、『トリスタン』のような、病的な性格を少しも否定しないようなとは又別な、不可抗的エネルギーである。(私は『トリスタン』をけなすのではない。私はそれを芸術的傑作だと思つてゐる。けれども、このいつさいを呑み込む嵐(トリスタン)の道筋は、奈落に向つて通ずることも有り得るし、また事実そこへ通じてゐる。そこにこの作の親密な意味^{インシム}、解放を与える死への渴望があるのである。) ベートーヴェンの偉大な風には決してそんな性質はない。それが吹いて来るのは、コーンウォールの牧者の怨嗟的な朗吟調をその轟きで奏する大洋や、死の深淵やからではない。それは春と夏との広野の上を吹く。それはその和音^{アコード}の行進のとおり単純で健康である。「それは畠と森と、そして闘う人間との呼吸」である。

さて、ここでわれわれは第三の段階に——Der Kampf(たたかひ)に到達する。

彼の感情を分析してみること慣れていない聴者といえども、幻想を与え、昂揚を与えるこの音楽の中に、根づよい一つの心的(psychique)なモチーフのあることに必ず気がついてゐるであらう。すなわちそれは二つの要素の間の

闘い、^{デニヤラ}広大な二元である。⁽¹⁾このことはベートーヴェンの最初の作から最後の作にいたるまで表われている。すでに一七九八年の『悲愴奏鳴曲』^{パティツク}や、また一八〇〇年以前に作られた情熱的な小戯曲であるところの、最初の四重奏曲や三重奏曲のアレグロのようなものの中に、諸君はそれを見出されるであらう。私は異なる人物と人物とが互いに傷つけ合うような戦いを、少しもそこに聴き取るのではない。(そう解釈するなら幼稚な解釈といふべきであらう。)⁽²⁾しかしながらベートーヴェンの気魄の——灼熱せる、勝手気儘でしかも逼迫せるこの嵐の如き気魄の統一そのものの中に、一つの魂の二つの様態、唯一つのものである二つの魂があるのである。それは結合し、また反撥し、論争し格闘し、互いに身体を絡ませ合っているが、それは戦いのためとも言えるし、また抱擁のためとも言える。不均衡な二つの力であり、また心の中で不同に発言する二人の敵手がそこにいる。一方は命令し抑圧する。他方は^{もが}跳き呻く。けれどもこの二人の敵対者は、征服者と被征服者とは、共に同様に高貴である。そして、これこそ重要な点である。両方の中に軽蔑にあたいたるようなものはまったくない。不純なものやいがわしいものは微塵もない。どんな汚点もない。世界の音楽の中で、これほど魂の清さの印象を与えたものはかつてなかった。——彼においては、勝利も敗戦も共にわれわれを裨益する。そして、どちらの場合にも同様に、われわれの心は日常凡庸の汚点を洗い清められる。

(1) もしくはいつそう正確に言うともっと後でそれが判るとおりに)それは存在の両分(dedoublement)であって、このことはベートーヴェンにあつてはいわば慢性の状態である。

(2) 例えばベートーヴェン自身はその友達ヴェーゲラーやシントララーなどのために喜んでその気にさせられていたといえ。(ベートーヴェンについて私が書く新しい本の中の或る章で、私はこの思想の戯れの理由を研究するであらう。)

この宿营地——これはベートーヴェンの聴衆の大多数がそこで立ち留まる場所であるが——に来るまでに、彼がどんな格闘をして来たかわれわれが知らないということを、諸君は認められるであらう。少なくともわれわれは、ベートーヴェンの存在の中にあるこの闘いの意味が何であるかを知らない。眼をとじてわれわれはそれに参与する。が、

すでにわれわれの本能は、われわれの誰もがこの戦いに加わったことがあることに感づいている。そして、もっとあとでわれわれがベートーヴェンの戦いの意味を知ってみれば、それは一つの新しい発見ではなく、われわれが定義できずに感じていた事柄に、ベートーヴェンの名を与えていたに過ぎないのである。ベートーヴェンのこの戦いとは、魂と運命との間のそれである。私はこれを少しも推定していうのではない。私の空想がこのことを、ベートーヴェンにかこつけていうのでは少しもない。ベートーヴェン自身がそれをいつている。彼の書いたものの中にこのことはたくさんある。とりわけあのフィッシュホフの写本の中に。その中の彼自身の感想及び詩人たちの作物からの書抜きは、すべていちように、宿命への挑戦の、悲劇的な調子を持っている。

(一) ベルリン図書館にあるErschoffの写本には、ベートーヴェンの原稿から写された日記が含まれている。

私はそれに関して二十の実例を挙げることができるだろう。そのうちの三つだけを選んでみる。それらは同じ階段を——巨人の階段を——のぼる三つの行進曲のようである。

一、「今、運命が我をつかむ……」自分は光栄なく塵の中に亡びざらんことを願う！……

二、汝の力を示せ、運命よ！……我らは自らの主人ではない。決定されてあることは、そうなるほかはない。

さあ、そうなるがよい！ (Was beschlossen ist, muss sein, und sei es denn!)

三、私にできることは何か？——運命以上のものであることだ！

同一の戦いの三つの叫び、三つの挿言^{エピソード}——身を跪^{もが}く誇り。克己的な忍受。そして精神の勝利。——われわれは彼の音楽の中でいかに度々この三つの叫びを聴くことだろう！……そしてあたかも、一本の樹に打ち込む樵夫の斧の響きが森全体に反響するように、ベートーヴェンのこの偉大な叫びは、全人類の心の中に反響する。

(一) この三つの断片は一八一五年および一八一六年のものである。最後の弦楽四重奏曲(作品第一三五)の中で提示されている間い

「*Muss es sein? Es muss sein!」（そのみか必然なのか？ 必然なのだ！）のはなはだきっぱりした答えを人は第二のものの中に認めるであろう。この（クワルテットの中の）問いの明確な意味は、ある批評家たちのために、慰み半分に、曖昧にされたり弱められたりしたが、あたかもステイナの一人の予言者（ミケランジェロの描いた予言者エレミヤのことを言うのであろう）のように、自分自身と劇的な会話をやる彼の精神の無限の論争を、問いてあり答えであるところの、あの言葉の中に認めないようならば、じっさいベートーヴェンに親しんでいないに相違ないのである。

思うに、彼の戦っているこの戦いは、またわれわれすべての者がやっている戦いなのである。それはあらゆる時代、あらゆる国のものである。人間の精神、その願望の飛翔、愛へ、可能へ、そうして認識への強烈なその羽搏き。これらのものがいたるところで鉄の手につき当る。すなわち、人生の短さやその脆さや、制限された諸力や、冷淡な自然や、病気や失意や、当外あてはずれやに。——われわれはベートーヴェンにおいてわれわれの敗北とわれわれの苦悩とに再会する。けれどもそれらは、彼によって高貴なものとなされ、雄大なものとなされ、浄化されているのである。

これが第一のたまものである。そうして第二の、最大のそれは、悩めるこの人がわれわれに勇敢な諦念を、苦しみの中の平安を与えてくれるそのことである。人生を在るがままに見ることの、そして在るがままの人生を愛することの、この諦念的調和を彼は自らのために実現し、またわれわれのために実現した。なおそれ以上のことを彼は成就した。彼は運命と婚姻して自分の敗北から一つの勝利を作り上げた。『第五交響曲』や『第九交響曲』の、あの心を酔ツイナレわせる終曲こそは、打ち倒された自分自身の身体の上に、勝ち誇って光明に向って立ち上る、解放された魂以外の何者であるか？

この勝利は孤独な一人の人間のもののみにとどまらない。それはまたわれわれのものである。ベートーヴェンが勝利を獲得したのはわれわれのためにである。彼はそのことを望んだ。——他人のために働こうとする専念は、絶えず

彼の心に還つて来た。願わくは彼の不幸が彼以外の人間に役立つがよい！ 諸君はハイリゲンシュタットの遺書の美しい言葉を憶えていられるであらう。

「不幸な人は、自分と同じ一人の不幸なものが、尊敬に値する芸術家と人間との列に伍すことを得しめられんがために、自然のあらゆる障害にもかかわらず、全力を尽したことを知って慰められるがいい！」（二八〇二年）

その期間のあらゆる交響曲が一つの勝利を表わしているところの、宏大な戦いの十年間の後に、幸福を渴望していたこの人がこの世には自分のための幸福はないと覺つたときの自己放棄の言葉は何であつたか？

«Du darfst nicht Mensch sein, für dich nicht, nur für andere.»

（お前はもう自分のための人間であることは許されていない。ただ他人のためにのみ……）（二八二年）

自分の芸術を他人のために役立てようという考えは彼の手紙の中で絶えず繰り返されている。ネーゲリへの手紙の中で、あらゆる利害関係的な考えから、あらゆる「ちっぽけな虚栄心」(keiñliche Eitelkeit) から自己を防ぎながら、彼は自分の生活にただ二つの目的を決定している。それは「聖なる芸術への」(an die göttliche Kunst) 献身と、他人を幸福にするための行ないである。

«Von Kindheit an war mein größtes Glück und Vergnügen, für andere wirken zu können.»

（他人のために働きうることは、子供の頃から私の最大な幸福であり楽しみであった。）（二八二年）

「哀れな悩める人類に (der armen leidenden Menschheit) 役立ちたいと思う私の熱意は、子供の時以来、少しも薄らいだことはない。」（二八二年）

他の場合に彼は又、「未来の人類」(der künftigen Menschheit) に役立つこと（二八五年）とも言っている。

この考えについて、われわれは思い違いをしないようにしましょう！ 功利的なまぐろみに屈従する芸術、デモクラ

シーへの実用的目的のために (ad usum) 製造せられ、もしくは修正されるところの芸術——今日「社会的」^{ソシヤル} 芸術と呼ばれているもの——に、それはなんら関するところはないのである。否。芸術はベートーヴェンにとつてはそれ自身において一つの目的である。

«Alles was Leben heisst, sei dem Erhabenen geopfert, und ein Heiligtum der Kunst!»

「生命と名のつくいっさいは至高者に献ぜられ、芸術に捧げられよ！」(一八一五年)

芸術は生ける神である。「おお、万事に優れる神！」(O Gott über alles!) (一八一六年)

«Zur Ehre des Allmächtigen, des Ewigen, Unendlichen!»

「全能者の、永遠者の、無限者の栄光のために！」(一八一五年)

そしてこれらの個人的な手記は、ベッティーナ(一八一〇年)およびヨハンネス・アンドレアス・シュツンプフ(一八二四年)がともに、ベートーヴェンの言葉だとしている宗教的な偉大な言葉と適合する——

「私の芸術の中では、神は他の何者よりも私に近くいる。……音楽はいっさいの哲学よりも更に高い啓示^{レヴェユアション}である。一度私の音楽を理解した者は、他の人々が曳きずつている不幸から脱却するに違いない！……」(Wenn sie sich verständlich macht, der muss frei werden von all dem Elend, womit sich die andern schleppen)

それゆえ人々の好みに合うところまで譲歩するというようなことはまったく問題にはならない。生ける神について、芸術について譲歩することは、できることではない！ 芸術を人々のところへ持って行って、人々の背丈に合うように低くするというわけには行かない。ただ彼らの方でそこまで高まるためにのみ芸術は人々に与えられるべきである。

音楽が今までに、ベートーヴェンの音楽の高さにおいてこそ、偉大な民衆的音楽の条件を具体化したとすれば『エグモント』や『第五交響曲』又はわれわれの「民衆祭」の土台石となるべきである『第九』の合唱^{コーラス}のように——又

ベートーヴェンがヘンデルと共に、特に理想的民衆、今日のそれよりもいつそう完成せる民衆、まさに有るべき民衆の歌手であつたとすれば——しかもかえっていかなる音楽家も、社会民衆に対して芸術家の独立を、かつてこれ以上のエネルギーをもって公言したことはなかつたとすれば、それはじつに上述の理由によることなのである。

——「自分は群衆 (Menge) のために書きはしない」と、彼は『フィデリオ』を作つた後に叫んだ。(一八〇六年)^①

(一) Roeckel.

そして一八二〇年、死の近づいたときに言った。

«Man sagt: vox populi vox Dei——ich habe nie daran geglaubt.»

(「民衆の声は神の声だ」というが、私は決してそんなことを信じたことはない。)

否！「民衆の声」は神の声ではない。「神の声」が「民衆の声」でなければならぬ。神の声こそ、ベートーヴェンが自らその通訳者だと信じ、それを人々の許まではこぶ者だと信じていたところのものである。そして民衆に奉仕する最善の、唯一の道は、このまったく純粹な声を、少しもその力とその奥底の真理とを弱めることなしに、彼らに聞かせることである。ところで、彼のうちなる神とは、彼の最善の部分、もつとも無私なる者、またもつとも勇ましきもの、すなわち彼自身の献身であるがゆえに、彼はその音楽の中で、この自己献身を他人に与えたのである。彼の音楽は彼の血である。それは十字架につけられ、そしてまさに復活しようとする魂が、贖われた苦惱の中で、人々に自己を糧としてそこで与えるところの一種の「聖餐」(Abendmahl) である。

彼に近づいていた同時代者らのうちのもつとも聡明な人々は、共感から得た洞察力によって、ベートーヴェンの衷なるこの偉大な献身の劇を十分よく認識していた。そうして、彼らの心は敬虔な感動のために締めつけられていた。レルシユタープ、ロホリッツ、フロイデンベルク(一八二一—一八二五年)は、「無数の人にただ喜びを、清き靈的な

歡喜を与えるところの」(der Millionen nur Freude bringt, reine geistige Freude)——又「世界に自己の最善のものを与えるために、ただに自己の幸福を犠牲にしたばかりでなく、自己の全部を捧げて深く傷つき、ほとんど自己の没落の縁にまで近づかねばならなかつた」(der um eben sein Allerbestes der Welt darzubringen, sich selber, nicht bloss sein Glück, tief verletzt sich wohl an den Rand seines Untergangs treiben muss) 悲しみの人、忍耐と憂鬱との人、der Kranke, schwermütige Dulder「病気の、憂鬱なる忍耐者」を描き出すがために、ほとんど同一の表現を用いている。

この悲愴な神聖な特徴こそはベートーヴェンの音楽に一つの徳を与えるものである。そしてこの徳は、聴者がこの音楽を他のあらゆる音楽と比較してみる時に、初めて後ればせに定義を与えようと思いつくところのものである。すなわち、それは、もし私がそう言つていいなら、「直接性」である、「心から心へ！」⁽¹⁾。

(1) 人の知る如く、これは彼の『莊嚴ミサ』の Kyrie (ミサの初めの祈禱) の上に書いた言葉である。「心より来る！ 願わくはふたたび心に帰れ！」(Vom Herzen ! Möge es wieder zu Herzen gehen !)

啓示を与えるものの心と、それを受け取る者の心との間になんの隔障もない。一つの贅言もない。感動の純粹な表現以上の、また以外の、一つの模様も、一つの飾りも、一つの強調もない。そうしていつさいが——表現も、感動も——この上なく直接で、この上なく簡明である……『フィデリオ』(一八〇四年)の後に彼が書いたとおりに「ますます簡明に」(immer simpler) である(一八〇四年)。

もはや叫喚も、身振りも、雄弁もない！——ベートーヴェンは最初の一撃でそこに到達したのではなかった。革命と帝政との時代——英雄的な情熱と行為とが羽飾りをつけて騎馬行列をしていたあの雄大な時代に生きた人間としての自己の性質に付着していたロマンチックな血氣に対して、彼はみずから戦わねばならなかつた。ベートーヴェンの前半生の作品には、そのもつとも高いものの中にさえ、崇高な『エロイカ』の中にさえ、なお帽子の羽飾のような自

負的な装飾がある。けれどもベートーヴェンが齡を重ねてその精神が次第に敬虔になるにつれて、彼はその雄弁の華々しい衣を剥ぎ捨てた。もはや対話すべき對手としてただ神をしか持たない以上、大げさな言い廻しなどは必要ではない。皆までも言わずに心が通じ合うのである。……「ますます簡明に！」(Inner simpler) 本質を言え！ 他は沈黙せよ！

かくしてある歌謡『悲歌』(Elegischer Gesang) や、また最後の弦楽四重奏曲やの、あの神聖な裸身に到達する。これは芸術の奇蹟である。しかも多くの芸術家たちは少しもこのことに気がつかない。芸術がそこにはないかのように見えるほど純粹で単純なあの輪廓の傍を、すこしもそれに注意を払わずに、冷淡に行き過ぎる芸術家たちを私は見た。彼らはそれが芸術以上のものであることを悟らない。あのように自己を捨てる高さにまで達するがためには、芸術の最高峰が一度到達されて、更にそれが越されなければならないのである。

高い教訓である、ひとり芸術家にとってばかりでなく、あらゆる人間にとつての！ なぜなら、このような絶対的な単純さと真実さとは、芸術の至高な成就であると同時に又きわめて雄々しい道德的徳性であるから。ベートーヴェンの「音楽の福音書」のなかでこのことの自覚に徹した人々は、もはや芸術と生活との中にある虚妄に耐え得なくなる。ベートーヴェンは正直 (droiture) と誠実 (sincérité) との大きい師なのである。

私は、私の同時代のあらゆる師たちからよりも、いつそう多くベートーヴェンから教ええられてきた。自分自身の最善なものを、私はベートーヴェンに負うている。そうして、あらゆる国々の無数の謙虚な人々が慰めと生きる力と、そして——(しかし私は魂の清さと真理とを、とは言わない。なぜなら、誰かそれをすでに獲得していると自負し得るものがあるうか?)——このような頂上及びその汚れのない靈氣への熱心な憧れとを、私と同じく、ベートーヴェンに負うていることを私は思う。

私は、これらの隠れた無数の弟子たちの恭敬を、「師」であり伴侶である人の足元に捧げるために来た。私たちは

——地上の全民族から成る私たちは、彼において結合する。彼は「ヨーロッパの親和」と人類愛との、輝かしい象徴である……

(一九二七年三月二十六日)

「ベートーヴェンへの感謝」はドイツでは、それだけで独立した単行本として音楽学者ネツトール教授の論文「ロマン・ロランと音楽」を添え一九五一年に初めて出版された。ここに収録したのは『ベートーヴェン偉大な創造の時期Ⅱ』（ロマン・ロラン全集24）みず書房、一九八〇年、四一三—二六頁）より

ベートーヴェン、最後の三つのピアノソナタ

杉田谷道

戦後の混沌のなかで、小誌『ベートーヴェンの生涯』

がどれほど多くの人に希望を与え、渴を癒してくれたか計り難いものがある。私はロランによってベートーヴェンの内奥の世界に導かれ、開眼させられ、作品一〇六のアダージョに啓示をうけたのもその頃であった。

そのしずけさの中に秘められた高貴な熱情、涙の谷からの祈りと憧れに永遠の音楽を感じ、魂はうち震えた。

私はそこに音楽芸術の表現しうる美の最も気高く深い響きを聴いた。音楽とは演奏によってのみ実在しうるものである。ベートーヴェンの音を究め、その一音一音を心をこめて歌い、霊と魂を喚びさます至高な美の世界を表現し伝達するために生涯をかけようと誓った。以来ロランは心の師友、導きの星となり「復活の歌」は、枕頭の

書となった。

「ベートーヴェン音楽の真の意味を理解したなら人類は今の五倍も幸福になったに違いない」とロランは言ったが、今、ピアノが普及しベートーヴェンがこのように身近になったのであるから、ロランの研究をひもといて、その音楽の内面の意味を知ることになれば、人は五倍も豊かな幸福を味わうのであろう。

つねにユニテ（合一）に立つて人文への深い洞察、真のホモユニヴァーサリス（普遍的人間）としての教養、芸術家としての直観と透徹したヴィジョンによってベートーヴェンの意識下の世界、音楽芸術創造の秘奥を明らかにしたロラン畢生のベートーヴェン研究は正に彼のモニュメンタルな偉業である。

ロランがソルボンヌ大学において初めて音楽の講座をもちその意義を認識させようとした功績を思うとき、日本の高等教育における音楽不在の現状を嘆ぜざるをえない。このレクチャー・リサイタルという形式もロランに啓発されたところが多い。

人類の危機を経験した私たちは、今こそベートーヴェンとロランの希求したユニテの理想をともし、実践すべき時ではなからうか。このたび、このような形でロランへの感謝を表せられることを心から欣び、ロマン・ロラン研究所の設立二〇周年を慶賀し、今後一層のご発展を祈念する。

ベートーヴェンの心

音楽は聖アウグスチヌスによれば、「魂を神性に近づけるための神よりの賜もの」(デ・ムジカ)であり、また同じく第一級の音楽家であった孔子は、「詩書礼楽、詩に興り、礼に立ち、楽に成る」——音楽による自己教育

の完成——を訓みそいた。音楽は心の最も秘奥なるもの——ロゴス——の表現である。音楽の心とは、「和の心」であり、ロゴスの靈妙なハーモニーを作る「心から心へ」の最も純粹で高尚なコミュニケーションである。

ベートーヴェンの32のピアノソナタは音楽の新約聖書に譬えられる。それは、「精神美の結晶」といわれる彼の音楽のもつ思想、精神性の高さが、それらに一つの徳性、永遠で普遍的な実相を与えているからであり、自己の内奥に聴しいたVox Dei(神の声)を最も完全な美の形式において誌しし、彼の美しい言葉によれば、「善への美」Das Schöne zum Gutenを、最後まで追求した彼の精神的な発展と、心の勝利の証——テストメント——であるからである。

最後のピアノソナタ3曲はベートーヴェンの畢生の大作「ミサ・ソレムニス」から生まれた果実といってもよい。聴覚を失い、自己の内に閉じこもり、神との対話に徹した彼の達した観照の境地において祈願されたものはAgnus Dei(神の子羊)におけるDona Nobis Pacem(われらに平安をあたえたまえ)、「内なる魂の平安と世界の平

和」であり、音楽の靈化による、音楽と眞の宗教との合一であり啓示であつた。

その平和は、ベートーヴェンが自ら葉籠中のものとしたピアノという楽器をとおして、これら3曲の終楽章のなかで歌われ、殊に「アリエッタ」のなかで成就されるのだが、その平和とは究極には、自らの魂の救済であり、その救いは美と愛との源である神の限りない恩寵に対する感謝の歌、心の最も深い情感をもつて歌われる祈りの歌であつた。

作品一〇六の *adagio* で歌われた *appassionato e con molt sentimento* の「最も崇高な宥恕の表現」は、これらの *adagio* におつては *molto cantabile espressivo semplice* (心から歌い、心からの情感と単純さをもつて) であり *dolce e teneramente* (心からのやさしさをもつて) が全曲を貫く感情である。これこそ彼の生涯をとおして求めた「苦悩を越えて喜びに到れ」*durch Leiden Freude* の氣高いメッセージである。

ベートーヴェンの求める音楽のなかで奇しくも成就した喜びと平安こそ、眞の宗教の求める心ではなからうか。

この芸術と神秘との合一こそは、精神文化の復興と新しい心の文化の創造に向けて歩む我々の果たすべき課題であり、「美の国」日本復興のため各人がこの天界の伝達者の聴いた音楽から、啓示とインスピレーション、「道心」を感じとる必要があるものとおもわれる。

(エリザベート音大教授、上智大学・南山大学講師)

杉田谷道(一九三三—二〇〇八)

ロマン・ロラン研究所設立20年記念、レクチャー・リサイタル「ベートーヴェン後期ピアノソナタの夕べ」の「プログラム」(一九九一年四月)より転載。

ベートーヴェンで死ぬことについて

濱田 陽

一 このテーマについて

どんな音楽を聴きながら死にたいか？ こういう問いかけをしてみたことがあるだろうか。そんなとき、西洋音楽では、ベートーヴェンがその知名度からも人生の師というイメージからも取り上げられることが多い。しかし、最近では、音楽学者からの脱神話化の研究などもさかんで、ベートーヴェン像も変わりつつある。そこで、ベートーヴェンを聴いて死ぬことについて考えてみたい。はたして現代人は、そして日本人は、ベートーヴェンを聴いてあの世へいけるのだろうか？ ベートーヴェンで死ぬのだろうか？

二 ゲーテとロランのベートーヴェン

ベートーヴェンの音楽の特徴は、どこまでも自己拡大していきこうとする運動と、その運動にうち負けることなく明確なフォルムをあたえ続ける強固な意志であるといわれている。この二つの特徴のうち、「運動」のほうにゲーテが、「意志」のほうにロマン・ロランが、特別な注意の目を向けたと思われる。二人は、どちらもきわめて深くベートーヴェンを理解した人物である。しかもゲーテがベートーヴェンを理解しなかったという当時の風説を、書簡や日記等の綿密な実証研究でくつがえしたのがすぐれた音楽学者でもあるロランであった¹。ところ

が、ロランがベートーヴェンを熱愛したのにたいし、当のゲーテはどうしてもその音楽を愛せなかったようである。

このようなゲーテとロランの態度の違いは、かれらが生きた時代の差からも考察できよう。ゲーテの頃は機械文明はまだ存在しなかったが、ロランはそれが現実化した時代に生きていた。つまり、ベートーヴェンの同時代人ゲーテは、その音楽の行く末に、異常な自己主張の危険と、その精神が物質化した蒸気機関の轟音（機械文明）とを鋭く察知し、知性が制御しえないものとしてしりぞけてしまった²⁾。ところが、機械文明の存在があたりまえな時代に生きたロランは、ゲーテとは逆にそうしたベートーヴェンの「運動」をさほど気にすることなく、英雄が自然や運命に打ち負かされた果てに勝利に至るといふドラマをその「意志」のほうに苦もなく見い出せたとと思われるのである。事実、ベートーヴェンは第一次、第二次大戦に抗するロランの平和運動の守護神でありつづけた。

三 現代人のベートーヴェン

しかし、二〇世紀も終焉をむかえ、われわれ現代人は、ゲーテともロランとも異なった立場で、ベートーヴェンに対面している。現代人は、ナチスやヒロシマをはじめ第二次大戦の経験以降、もはやベートーヴェンの時代の人間のようにユートピアの実現を単純に描けなくなりました。また、環境破壊等の危機的状況からも、限度をもうけない自然搾取などの近代的システムの矛盾が露呈してしまった。さらに、機械文明はすでにエレクトロニクス文明に変貌し、ベートーヴェンの「意志」による制御でなくコンピューターによる自動制御がなされている。これらの条件下では、ベートーヴェンを聴くことの意味が違ってきて当然である。

四 ベートーヴェンの聴き方

私は、現在のわれわれのベートーヴェンの聴き方には、

①バックミュージック、②祭り、③回想、④パロディの四つのタイプがあるように思われる。

①は、「エリーゼのために」やピアノソナタ「月光」第二楽章のような有名な聴きやすい曲をムード音楽として流すこと。今はベートーヴェンに限らずクラシック全般にこうした聴かれ方が多くなった。ただし、シンフォニーのような長大で起伏の大きいものは、これには向かない。

②は、大阪城ホールの「一万人の第九」が典型的。毎年、決まった時期にくりかえされ、演奏する側も聴衆も、一体となって生活のエネルギーを発散させる。そして、そこでは第九シンフォニーの描く単純な人類共同体のユートピアが支持される。また、第一次大戦時、ドイツ人捕虜によって第九が日本で初めて演奏された徳島県鳴門市で、演奏会のアンコールに突然第九が阿波おどりのリズムに変わり、合唱団が舞台で「エライヤッチャ、エライヤッチャ」「踊らにヤソンソン」と、盛り上がったという面白い話もある³⁾。ベートーヴェンの土着化、祭りとの出会いの一例として考えられる。

③は、ロラン以前の時代にタイムスリップしたような気持ちになりきって聴くこと。蒸気機関車SLのファンのようにベートーヴェンに浸る。ベートーヴェンの偉大さをよりよく味わうために、今日の感覚ではむしろおとなしく聞こえる一八世紀編成のオーケストラの音響を、わざと轟音として聴きたくて、ヘッドホーンをつけボリュームを最大にする。(そんなことをしなくても、じつは現代では、テレビや街中でいくらでも騒がしい音を聴くことができるのだが。)

そして、④は、たとえばロシアの映画監督タルコフスキーの作品『ノスタルジア』での第九シンフォニーの使われ方などがそう。映画は、核戦争による壊滅の危機が背景となる。そして、狂った老人が狂人たちの見ている前で、「自分たち愚かなるものがあなた方に話しかけなければいけない」ということは恥ずかしくないか」と叫ぶ絶望的なシーンのバックに「歓喜の歌」が鳴る。ロランのベートーヴェンとはまったく対照的に、狂人(狂わされた一般人)の(必ずしも勝利とはいえない)殉教があり、パロディ化されたボロボロのベートーヴェンがある。そ

れは個人の魂を超えた、人間の共同体自体が発している声、祈りえない状況でのぎりぎりの祈りという感じがまさにする^①。第二次世界大戦後、ナチスや核兵器を経験したあとでは、ベートーヴェンのユートピアが簡単に実現するとはもはや信じ難い。それでも、人間としてなんらかのユートピアに憧れざるをえない。そういう、屈折した心理が西洋の戦後の多くの芸術家のベートーヴェン解釈をパロディへと導いている。

五 ベートーヴェンで死ぬるか？

生演奏され、CDで聴かれ、コマーションに使われて、以上のほぼ四種類のベートーヴェンが、現在、世界のあちこちで、鳴っている。もちろん、決まった一つのタイプだけに紋切り型に分類されるのではないが、クラシックに特別詳しくない一般の人は、①や②の傾向が強く、クラシック通は、③、④の傾向が強いのではないかと思われる。そこで、ベートーヴェンの音楽を愛好し、人生

の大切な節目でベートーヴェンを聴き、できれば、死ぬときにもベートーヴェンを聴きたいと思っている人がいる場合、その人が①～④のどのタイプに近いかによって、死を看取る音楽の意味も当然変わってくると思われる。

①や②のタイプの愛好者は、ベートーヴェンの音楽の印象的なメロディーや覚えやすいリズムなどを巧みに日常生活にとりこんでいて、自分たちのほうにベートーヴェンを近づけている。そのため、死ぬときには、ベートーヴェンの音楽を、今までの人生をふりかえるための、記憶の倉庫の扉をあける鍵としてもちいそうな気がする。ここでは、ベートーヴェンの音楽の本質が大部分切り取られてしまっているため、ベートーヴェンを聴いて死ぬことに固有の意味はあまりないのではないだろうか。どのジャンルの音楽でも親しまれるうちに、こうした機能を共通してもつようになるため、他の音楽でも代替できるからだ。

私は、どうしてもベートーヴェンで死にたいという人には、③のタイプの人が一番多いのではないかと思う。ベートーヴェンは、苦悩を突き抜けて歓喜に到達した精

神の英雄だ。彼の音楽は、平和の象徴だ。だから、人生の最期にベートーヴェンを聴きたい。そういうメンタリテイ。今思うと、私自身、高校から大学のはじめにかけてこのタイプのリスナーだった。しかし、もし、このタイプの人が時代の変化をシャットアウトし一人閉じ籠って、ただベートーヴェンにのみずがるなら、それは不幸なことかもしれない。英雄的な死をとげようとして、時代錯誤の一人芝居を演じてしまう危険がともなうからだ。

六 ベートーヴェンと無常感

そこで、ベートーヴェンの音楽の特徴を理解しつつ、意味ある死をとげたければ、どうしても④のタイプに近いところからのアプローチになるのではないかと思われる。『ノスタルジア』の狂人のように、救われなさと絶望しつつ、それでもベートーヴェンを聴いて死ぬ。決して英雄的行為ではなく、ぎりぎりのところでの叫びだが、ベートーヴェンの音楽は、かえってリアルに鳴り響くの

ではないだろうか。タルコフスキーがこの映画を作った頃とちがいで東西冷戦は去ったが、激しい地域紛争や改善されない環境破壊など、現代が危機的状况にあることは変わっていない。

近代文明の限界にベートーヴェンの限界を重ねる感受性が自然にそなわっていた西洋人と異なり、戦後の日本人は、むしろベートーヴェンの「運動」や「意志」を、経済成長の達成に邁進するメンタリテイに近いところで、とらえてきたようである。しかし、もし、④のパロディの感覚と唯一対比しうるものとして、仏教を受容した日本人が近代以前から培ってきた無常の感覚、悲哀の感覚を現代においても挙げるができるなら、そうした無常感から逆説的にベートーヴェンが受け止められた時にはじめて、ベートーヴェンを聴きながら死ぬことの意味が、日本の土壌で深化するのではないか。そしてベートーヴェンである世へいけるのではないか。あるいはもはや、無常感もベートーヴェンも二一世紀に生きる人の死に、かかわることはなくなっていくてしまうのだろうか。

(京都大学大学院生・一九九六年一月二四日)

註

- (1) ロマン・ロラン全集23『ペーローヴェン研究I』みすず書房、一九五九年より
- 『ゲーテとペーローヴェン』片岡美智訳 一九五二年（ロランの原出版は一九三〇年）
- (2) 『ゲーテの耳』中沢新一著 河出文庫、一九九二年では、ゲーテがペーローヴェンの音楽に蒸気機関の轟音を予感したとする興味深い考察がある。
- (3) 一九九三年六月七日 朝日新聞（大阪版）朝刊、二三頁
- (4) 一九八三年イタリアで制作。狂人の友人である亡命中の音楽家が主人公。大江健三郎は『新しい文学のために』一九八八年、『オペラをつくる』武満徹と共著 一九九〇年（どちらも岩波新書）のなかで、『フスタルジア』の第九の鳴るシーンについて言及している。

文献

- 『ロラン⇨マルヴィイダ往復書簡、一八九〇年―一八九一年』南大路振一訳 みすず書房、一九八八年
- 『モオツァルト・無常という事』小林秀雄著 新潮文庫、一九六一年
- 『ペーローヴェンの手紙（上）』小松雄一郎編訳 岩波文庫、一九八二年

この文章は、ロマン・ロラン研究所での第一七三、一七四回読書会での発表をもとにまとめたものです。

（初出『ユニテ』23号、一九九六年より）

濱田陽さんは現在、帝京大学文学部日本文化学科教授。専門は比較宗教文化、日本文化研究、文明論。

ピアノとベートーヴェン

園田 高弘

今年、ロマン・ロラン友の会創立五〇周年ということで、ここで演奏することになりました。どうして私がロマン・ロランと関わったかということをお話したいと思います。

昨年、私の七〇歳記念演奏会の時に、みず書房の編集者をやっておられた高橋正衛さんという方が楽屋にいられて、立ち話をしながら「実は、来年ロマン・ロランの友の会創立五〇周年だが、演奏会をやってもらえないかなあ」と、ご依頼がありました。その時私は、創立の時に、東京・神田の共立講堂で演奏したことをちょっと思い出せませんでした。「いいですよ」と、簡単に言ってしまうました。あとで実はその時に私が演奏した

こと、そして宮本（正清）先生もお話しになったというようなことを伺って驚愕したわけです。

その高橋さんに、今度ここでお目にかかるつもりだったのですが、ヨーロッパから帰ってくる飛行機のなかで新聞を見ていたら、高橋さんが亡くなられたという記事が突然目に入りまして、悲しいですが、飛行機の上でどうしようもなく驚いたわけです。心からご冥福をお祈りしたいと思っております。

五〇年前と申しますと、ここにいらっしゃる方はほとんどお生まれになっていないのではないかと思います。今日、この立派なパンフレットを拝見していますと、ロマン・ロランがベートーヴェン没後百年の一九二七年に

講演をされたと書いてありますが、私は一九二八年の生まれなので生まれていません。やはり時というのはほとんどん流れていくのだからということを感じました。それともうひとつ雄大な話というのは、あそこでビデオをお撮りになっているのですが、あれは一〇〇周年のために、私の話を録画するというのですが、私はもちろんその時には生きていないわけです。ここにおられる方もあと五〇年というのはなかなか大変ではないかと思えます。

五〇年前と一口にいいますが、その頃の日本といえますのは、今考えてみても、貧しい戦中戦後の時代で、私は、ちょうど中学校から上野の音楽学校、現在の芸大ですね、それに至る頃でした。その頃はもっぱらフランスの自然主義文学というのに憧れていまして、かたがしから乱読していました。モーパッサン、フローベール、スタンダール、デュマ、ゾラそしてアンドレ・ジイド全集などを買って読んでいました。マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』とか、ラディゲの『ドルジェル伯爵の舞踏会』であるとか、そういうのを漁って読んでいた時代でした。音楽学校を卒業した頃、たまたま演奏

会で前出のみず書房の高橋さんという方にお会いしました。みず書房には、その頃、みなさん、よくご存知かもしれませんが、青木やよひさんといってベートーヴェン研究の本をいろいろ書いておられる方や評論の北沢方邦さん、そういう方々がおられました。

当時「ロマン・ロラン全集」を刊行中で本を頂いたりして、それがきっかけで片山（敏彦）先生とか、宮本先生という名前を知ったわけです。そのロマン・ロランの「ベートーヴェン伝」というのを初めて読んで私は大変感動しました。自分が音楽をやっていますので、ベートーヴェンというのは多少は楽譜を通じて知っていましたが、初めて「ベートーヴェンの生涯」というものを読んでほんとうに感動したのです。それから『ジャン・クリストフ』や『魅せられたる魂』という長大なロマンを読んで感銘を受けた記憶があります。「ベートーヴェンの生涯」というのは、ほんとうにそれまで私が、文学などを漁って読んでいたものとは全然違って、自分がほんとうに音楽をやろうと志していたこともあって、眼を開かされるものがありました。

その後、「ベートーヴェン研究」の三巻の著書によって、さらにベートーヴェンという作曲家に興味が湧いたわけがあります。何に最も興味を湧かせたかといえますと、ベートーヴェンという音楽を文学で語る事ができるのだということでした。ロマン・ロランの文章の美しさというのは特別なもので、それに非常に緻密で、ある時は装飾的で感情的であるのだけれども、その表現というものに非常に魅了されたわけがあります。

私自身のことをその時考えてみますと、その頃本当にベートーヴェンの作品を熟知していたかどうかといえますと、そうでもなかったのではないかと……。むしろロマン・ロランの文章によって、ベートーヴェンの最後の三つのソナタであるとか、「ハンマークラヴィーア」であるとか、あるいは「ディアベリ変奏曲」というもの、そういうものに対して何か関心が湧いてきたという感じだったと思います。

特に「ハンマークラヴィーア」のアダージョについてロランと老女マルヴィータとの出会い、そしてマルヴィータがそれを静かに弾いてくれたことをロランが感

動して書いていますね。そういう文章に接して人間というの、精神的な繋がりが非常に重大なのだと感じたわけです。もちろん、それによってベートーヴェンの偉大さやうかがい知ることができたわけです。ロマン・ロランを読んだことが、私にとって、ものを考えることの下地になったといっていると思います。

その頃、フランスに留学したこともあって、少し病気をし帰国しまして、カラヤンと初めて共演することになったときには、私はドイツ語をしゃべらないでフランス語でカラヤンとお話をしたというような不思議な経過をたどっていました。

私が本当にドイツというものに目覚めたのは、ドイツへ行って、せっかくドイツに来たのだから、ドイツの精神文化、文学そして哲学、そういうものに関心を向けなければと思います、本を読み出した時からでした。それがドイツ化ということなのでしょう。本を読むということについては、ベートーヴェン伝もベッカーであるとか、リーツラーであるとか、セイヤーであるとか、ノールとか、そういうものを丹念に読み出して、そこで初めて口

マン・ロランの偉大さというものをまた知ったわけです。話がどんどん長くなるので、少しはしよりますと、今日は「ピアノとベートーヴェン」という題に即してお話をするということになっております。

我々は、今日、音楽史を上から俯瞰的に全部ながめることができます。偉大なバッハがバロックを集大成したといわれていますが、神様がそう仕向けたんじゃないかと思うわけです。同様にベートーヴェンについても、そういうことが考えられるのですね。ベートーヴェンの時代というのは、偉大な先生のハイドン、そして天才的なモーツァルト、そういう人たちが歩んできた道をさらに進めてベートーヴェンの時代に楽器が発展・発達をとげて現在の楽器に近くなってきたわけです。バッハの頃というのは、鍵盤楽器はほとんどクラヴィコードかチェンバロしかありませんでした。まことに簡素な楽器でバッハの時代には、ピアノがなかったのですね。

モーツァルトの頃になつてはじめてチャラチャラ軽い楽器で弾けるようになったために、モーツァルトはピアノ協奏曲をたくさん書いています。モーツァルト

が天才的なピアノ協奏曲を多く書いたことによって、先生であるハイドンは——ハイドンという作曲家はあらゆる分野の作品を書いているのですが——、ピアノ協奏曲は書かなかつたのです。チェンバロ協奏曲はありますけど……。というのは、おそらくハイドンはモーツァルトを見て聴いて、自分はこの分野をやらなくていい、モーツァルトがやってくれると思つたのでしよう。ハイドンはまた弦楽四重奏をたくさん書いています。ところが最後の頃になつて、ベートーヴェンが弦楽四重奏を書いた時に、彼は筆を折るのでですね。もうそれ以後、弦楽四重奏を書かなくなる。これがまた、ハイドンの偉いところだと思います。

ハイドン、モーツァルトを経てベートーヴェンの時に、今あるようなピアノが出来上がって、楽曲としてはソナタ形式というのをベートーヴェンが完成させたといわれています。今ここに八八鍵のピアノがありますけれど、ベートーヴェンの時は、FからFまで六一鍵しかなかったのです。「アパッショナータ」の時、初めて、六八鍵というFからうへのCまでという楽器ができました。

今これが八八鍵ですから、それよりもまだ二〇鍵多いですね。上下に多いわけです。ベートーヴェンは、その六八鍵を使って、上から下まで縦横に駆けずり回るような作品を「アパッシヨナータ」で書いているわけです。ですから、長い音楽史の流れを見ると、バッハから始めて、ハイドンを通じ、モーツァルトを通してベートーヴェンの「アパッシヨナータ」が鍵盤楽器の頂点である作品といわれてもおかしくないのです。

ところで、ベートーヴェンはピアノの名医でしたから、生涯心を託すことができた楽器としてピアノというのを選んだわけです。ベートーヴェンのピアノ曲をずっとたどっていくことによってベートーヴェンの精神的な発展の歴史、作曲の技法すべてを推察することができるわけです。ソナタ形式の完成というのは、音楽家にとって大変なことでした。まあ、簡単にいえば一楽章がアレグロであり、二楽章がアンダンテあるいはアダージオであり、あるいは三楽章がメヌエツトからスケルツォに至り、四楽章がロンド形式でそれを最後に拡大してフーガ形式ということですが、それは、全てベートーヴェンが完成した

ことで、これをシンフォニーとか室内楽とかの大きな作品に使うようになった。そのベートーヴェンの頭の中には二元的、対立する概念というのがありまして、デュアリテイといえますけれども、相反する性格のものを並列する傾向があった。それから二楽章形式という大きな流れを誘発することになった。

音楽というのは時間の芸術ですから、五分のものは五分聴いてからその印象を得る、三〇分の作品は三〇分聴いた後でその印象を得ることができる。初めにぱっと見てもものがわかってという性質のものではないですね。しかもそれは、印象でしかないから、繰り返し聴くことによって、あるいは分析的に楽曲を解析することによって始めて、全貌がわかるわけです。コンピュータはその頃ありませんでしたから、ずっとインプットして、ぱっと見るわけにいかなかったのです。だから、名曲というものには、そういう鑑賞に耐える立派な形式をもっていなければならなかったのです。しかし形式というのは、楽曲の形ですから、その背後にあるものがどういう意味をもっているのかということに思いが至らなければ、その

形式だけを見たのではわからないのです。

少し雑談のように聞こえますが、これはその形式を説明する下敷きになるので。皆さんよくご承知のように、ベートーヴェンというのは、あまり美男子ではなかった。非常に気の毒なというほどでもないのですが、醜男であつたらしい。しかし生涯非常に女性にもてた。なんでもうなつたのだろうといろいみんな解説しているわけですが、ベートーヴェンというのは真実の追究を常にやっていた。単刀直入に物を言つて、しかもそれが非常にユーモアがあつた。そして誠実であつた。そういうことが魅力であつたのではないかと思われます。

よくベートーヴェンにまつわる五人の女性という話をするのですが、ベートーヴェンがボン時代に非常に親しくお世話になつていたブロイニングという家系があつたのです。そこのお嬢さんでエレオノーレ・ブロイニングという女性がいます。そしてベートーヴェンのボン時代から生涯親しくつきあい文通していたお医者さんがいました。それがヴェーゲラーというお医者さんなのですが、そのお医者さんの末裔が、今コブレンツツというボン

からひとつライン川を下がってきたところのモーゼルへ行く三角形のところにある町ですが、そこでワイン業をやっています。ラインのワインを造っているのです。なんでそんな話をするかという事です、そのワインセラー、地下室の深い所に代々そのヴェーゲラーが守つてきた宝物がある。そのエレオノーレという女性は、あとで枢密顧問官ヴェーゲラー博士（お医者さん）の奥さんになつたのです。

ベートーヴェンが死んでしまつてから、いろいろベートーヴェンの昔のことを収集したのです。ほんとうかうそか分かりませんが、ベートーヴェンが洗礼を受けた時の帽子であるとか、髪の毛であるとか、雑記帳の切れ端だとか、ベートーヴェンとエレオノーレがたくさん文通をしたわけです。ボン時代の青年時代、若い時に誕生日や何かのお祝いごとなどで文通したそれらを全部丹念に集めて、そのコブレンツツのワイン業の地下室の所に埋めてありました。大きな立派な銅で囲つた種々象嵌がしてある大きな箱に入れて埋めてあつたのです。それは、戦争中にナチも気がつかなかつたのですね。

戦後になって、つい数年前に家族会議を開き、これをベートーヴェン・ハウスに寄贈しようということになって中を開けてみたら、今まで知らなかった文章がたくさん出てきました。

そのエレオノーレという女性が、ベートーヴェンの生涯にとって最初の情熱の対象であり、若き頃の思い出であったとはっきりわかるのですね。それと、ベートーヴェンが耳の疾患でハイリゲンシュタットの遺書を書きます。それよりも前に、ヴェーゲラー博士に自分の耳の疾患のことを相談している手紙が出てきたのです。そういう、大変衝撃的な感動的な文章、そして品物がたくさん出てきて、それがベートーヴェン・ハウスに展示されています。

ところで、なぜそういうことを言うかといいますと、ベートーヴェンの中で不思議な音楽の調性があるのですね。変イ長調。これは単純に今まで、単純でもないけれど、生涯満たされなかった母性に対する憧れであるとか、そういうふうには解釈されていた。例えば「悲愴」ソナタの二楽章であるとか、「運命」交響曲の第二楽章である

とか、変イ長調であるのは、そういう調性だと簡単に（簡単にでもないですけど）思っていた。ところが、『フィデリオ』の中のレオノーレを表わすそのメロディというのは、変イ長調で出てくるのですね。ベートーヴェンというのは、生涯その変イ長調にこだわって、最後の三つのソナタの中の一一〇というすばらしい作品は誰にも捧げていないですよ。これが、どうしても捧げなかったか、というのが長いことわからなかったのだけれども、どうもそういうことでないかという推測がつくわけですね。

また時間がどんどん経つので、五人の女性の話なのですけど、「アパツシヨナータ」という作品はブルンスヴィック家のフランツというその青年に捧げたことになっています。ところが、そのブルンスヴィックというのはテレーゼというのが長女で、ジョセフィーヌが次女で、フランツが三番目、シャルロットというのが、末の女性。そしてベートーヴェンが死んだときに、秘密の引き出しを開けたら写真が出てきて、シントラという早合点する公僕がベートーヴェンの召使いたいにいろいろ

ろ身辺を世話していたので、その人が、「ああこれはテレーゼだ」と言ったので、テレーゼと不滅の恋人という手紙が結びついてしまってますね、不滅の恋人はテレーゼということに長いことなっていました。それで、その立ち会った人たちはすぐ、すぐでもないですが、四〇から五〇年たつて死に、長いこと不滅の恋人は誰だということでも推論があつたわけですよ。

ところが、話をはしりませんが、どうもテレーゼではなくてジョセフィーヌではなかったかというのが最近になって言われるようになった。それは、今世紀になつてからジョセフィーヌに宛てた一三通のラブレターというのが発見されたということがあるわけです。そうしてみると、その「アパッショナータ」を捧げたのはフランツなんだけれども、フランツという青年は女性に囲まれたあまり感情の豊かでない男であつたようなんです。それに、ベートーヴェンがなんで「アパッショナータ」のようなすばらしい作品を捧げたかということが長い間問題にされていたので、どうもベートーヴェンのめばしい相手方はジョセフィーヌでなかったか……。ところがで

すね、そこに一つ問題があつてですね、その手紙というのはみんなB♭（あなた）というふうにかかれてる。

ところが、発見された不滅の恋人はB♭なのでね。お前という非常に直載的な名称で書かれています。だから、どうもジョセフィーヌでないということで、長い間、ああでもないこうでもないと言つていたところへ、最後の三つのソナタというのが出てくるのです。ベートーヴェンの伝記をお読みななればよくわかることですが、ベートーヴェンの年代として一八一三年という謎の年というのがあるので、この頃ベートーヴェンは創作がほとんど出来なくなつて、もうベートーヴェンは創造力が枯渇してだめになつたのではないかとみんなに言われていました。ところが、どうもそうではなくて、その時に大事件があつたという通説なのです。それを最近になつて、駅馬車の発着の日から天候まで、まるで推理小説のように丹念に辿つてですね、一八一三年という数字がでてるのです。そしてベートーヴェンが四三歳ぐらいではないかと……。そうするとその日は、ベートーヴェンの四三歳の時しか可能性がないそうです。宿帳も全部繰つて

みたとかです。そういうふうにして、それから十何年たつて一八二〇年から二三年にかけて最後の三つのソナタというものが書かれているわけです。しかも、第九シンフォニーと『ミサ・ソレムニス』の間に書いたといえますから、ベートーヴェンというのはすごいですね。そして最初に作品一〇九（ピアノソナタ三〇番）というのがあるのですが、これをブレンターノ家のマクシミリアーナという女性に捧げます。それが一八歳の女性なのですね。いくらベートーヴェンでもね、一八歳の女性にそんなすばらしい遥かな恋人に寄せるようなメロディーをちりばめた曲を贈るわけがないと誰でも考えますよね。そうすると、その母親のアントーニアという女性が浮かび上がってくる。ブレンターノ家のアントーニアとベートーヴェンというのは、最後に非常に重要なかわりがあったのではないかと、そうなってくるわけです。ところが、その三つのソナタをルドルフ大公が見て、「俺にも一曲よこせ」と言つて、一一一を取ってしまったのです。

ところが、ベートーヴェンはその一一〇の変イ長調の

作品は誰にもがんとして渡さなかったのです。そしていろいろシントラレーヤなんかの話を総合すると、その三つのソナタはアントーニア・ブレンターノに捧げるために書かれたということになっているのです。そうするとその不滅の恋人というのはどうも、アントーニア・ブレンターノでないかという説が最近になって勃然として浮かびあがつてきまして、先程お話しました青木やよひさんの本には、それが克明に推理されております。

しかしこれは、ベートーヴェンに聞いてみないとわかりません。ベートーヴェンは非常に人をはぐらかすことで有名で、ある時みんなが月光のソナタ、月光のソナタと言っているけれども言つたら、俺はテレゼの曲のほうが好きだというようなことを言つたとか、そうすると、それをもとにしてテレゼがその本命でないかと、シントラレーヤはすぐ早合点する……。

その前に、月光というのは、ジュリエッタという女性がいいたわけですね。月光はそれをイメージして書いた作品ですから、初めのエレオノーレがあつて、ジヨセフィーヌがいて、テレゼがいて、そして最後にブレン

ターノ家のアントーニアがいたのではないかと言うことです。これは本当にベートーヴェンに聞いてみないとわからない。

まだ、いろいろお話しするつもりだったのですが、あんまり時間がないので、ロマン・ロランという作家は、ここにもいろいろプログラムに書かれていますけれども、ユマニストであり、偉大な思想家であり、そして文芸評論家でもあり、そして作家であった。ロマン・ロランという人物を称えるためには、いろいろな方法があるだろうと思うわけです。しかし、私がそもそも日本のロマン・ロラン友の会の創立、五〇年前のことでありまして、それにベートーヴェンという作曲家の代表的な作品を問わずも、私はその時はわかってなかったと思うのですけれど、周りの偉い方々が、こういう曲を演奏してくれと言うので、演奏したことが機縁になって、今日このようにみなさんにお集まりいただいてこれから演奏することになりました。

ベートーヴェンとの関わりを、私の関心事、そして、思い起こせば古い話なのですが、それがだんだん

ん変化してきたということを、みなさんに多少なりともおわかりいただけたらと思いい、これでお話を終わりたいと思います。

ありがとうございます。

(ピアニスト)

園田高弘(一九二八―二〇〇四)

一九九九年一〇月八日、京都コンサートホール(小)において演奏に先だってお話しされたものです。

(初出『ユニテ』27号、二〇〇〇年より)

『ジャン・クリストフ物語』 朗読会（二〇二〇年一〇月二五日）

あけぼの Ⅲ—二 ゴットフリート

朗読 村 田 まち子

クリストフは甘やかされて台なしになるところだった。しかし彼の生まれつきの賢さと、ある男ひとの感化が彼を救った。それは誰の目にもごく平凡な男だとしか見えなかった、ルイザの兄のゴットフリートであった。

彼はルイザのように小柄で、痩せて、貧相で、少し猫背だった。しわの寄った赤みを帯びた小さい顔に、人の善さよしみ そうな青い眼をしていた。この伯父さんはちっぽけな行商人で、香料、文房具、糖果、ハンカチ、襟巻き、靴、缶詰こぶみ 曆、流行歌集、薬品などの雑貨を入れた大きな梱こむを背負って村から村へと廻るのだった。伯父さんは久しく顔を見せないと思っていると、また訪ねて来るのだった。ある晩、入り口に人の気配がした。やがてドアが開いて、小さい禿げ頭と一緒に、人の善さよしみ そうな眼がおおずおおずした微笑みを浮かべて現れた。

伯父さんは「皆さん、こんばんは……」と言って、入る前にていねいに靴を拭いた。それから年順にみんなに挨拶して、いちばん下の席についた。

お祖父さんとメルキオールはこの小さい男を軽蔑していた。この男が行商人というちっぽけな身分だったからである。しかしルイザはこの実の兄を心から愛していた。兄も妹を、口には出さないまでも尊敬していた。ルイザもゴットフリートも不幸な兄妹で生活のための辛苦をなめていた。それだけ兄妹二人はいつくしむ心の絆で結び合わされ、

たがいに愛情を抱いていた。

クリストフは少年の残酷な軽はずみから、お祖父さんやお父さんを真似て、この小さな商人を軽蔑していた。なにか滑稽なもののように彼をおもちゃにした。いくら馬鹿げた悪さでいじめられても、ゴットフリートは相変わらず平気で耐えていた。けれどクリストフにはなんとなくこの伯父さんが好きだった。まず自分の思うままになるので好きだった。次に、お菓子だとか、絵だとか、面白い発明品だとか、いいものをくれるから好きだった。

伯父さんが戻ってくるのは子供たちにはたいへんな悦びだった。クリストフは眠れない夜など、この親切な伯父さんのことを考えて、ときどき感謝と同情の念にうたれることがあった。しかし、昼間になると、もう伯父さんからかうことばかり考えていた。

ある晩、メルキオールが留守で、ルイザは二人の子供を寝かしていたとき、階下の部屋に一人残っていたゴットフリートは、家のそばを流れる河岸に出ていった。クリストフも付いていった。子犬のようにもつれながら、伯父さんをいじめ立てた。息切れして疲れると、草のなかへ腹ばいになって笑ったり、悪口を言ったりしていた。伯父さんは黙り込んで返事がなかった。ふと顔を上げると伯父さんの眼に出会った。ゴットフリートの顔はうす霞がすみに消えてゆく夕陽に輝いていた。彼は眼を半ばつむり、口を半ば開けたまま微笑みをもらしていた。不幸に苦しんだ顔には、何とも言われぬ厳肅さが漂っていた。クリストフは頬杖をついてじっと彼を眺めていた。夜が迫ってきた。ゴットフリートの顔は少しずつ消えていく。静寂がわたる。やがてクリストフはゴットフリートの顔に浮かんだ神秘的な印象に驚かされた。クリストフはほんやりとなっていた。草むらではこおろぎのトレモロが響さびいていた。小波がささやいていた……

不意に暗闇のなかでゴットフリートが歌いだした。彼はかすかな曇った内部から聞こえてくるような声で歌った。二十歩も離れたら、その声は聞こえなかったであろう……けれど、それには人の心をそそるような真心がこもって

た。クリストフは一度もこんな歌いぶりを聴いたことがなかった。こんな歌も聞いたことがなかった。それは緩やかな、単純な、幼稚な歌で、重々しい歩みで、やや単調に、うら悲しい調子でゆるゆると進んでゆく。それから長い沈黙——やがてにわか高い調子にかえり、ゆきつく先もかまわず暗闇のなかに消えてゆく……それは遙かかなたから聞こえてきて行方も知れず去ってゆく。その静けさのなかには苦しみが充ちていた。外から見ると安楽のかけには、長い年月の苦悶がまどろんでいた。クリストフは、もう息もつかなくなった。身動きさえもせず、感激のために身に寒さを覚えた。歌が終わると、クリストフはゴットフリートにすり寄って、叫んだ。

「伯父さん！……」

ゴットフリートは答えなかった。子供は伯父の膝に両手をかけ、頭を乗せてくり返した。

「伯父さん！」

「坊や……」

「ありや何なの、伯父さん教えて！ 何を歌ったの？」

「知らない」

「なんだか言っておくれよ！」

「知らないよ。歌だよ」

「伯父さんの歌かい？」

「馬鹿な！……わしの歌かい！ 古い歌だよ」

「誰がこしらえたの？」

「わからないよ……」

「いつ？」

「わからないよ……」

「伯父さんの小さい時分にかい？」

「わしの生まれる前だ。お父さんのお父さん、そのお父さんの、お父さんの、またお父さんの生まれる前だ……あの歌は昔からあったのだよ」

「変だな！ 誰もそんなこと話してくれなかったよ」

「クリストフはちよつと考えてふたたび、

「伯父さん、もつと他のも知っているかい？」

「ああ……」

「他のを歌ってくれない？」

「なぜ他のを歌ってほしいんだ？ 一つでたくさんだ。歌いたいときか、歌わねばならないときに歌うものだ。慰みに歌うものじゃないよ」

「だって音楽をこしらえるときには？」

「こりゃ音楽じゃないよ」

少年は頭を傾げた。彼にはよく合点がゆかなかったけれど、説明は求めなかった。なるほどあれは音楽ではない。ほかの歌みたいに……

「伯父さん、伯父さんはこしらえたことがあるかい？」

「何をさ！」

「歌をさ！」

「歌だって？ なに、どうしてわしにできるもんか。歌はこしらえるもんじゃないよ」

「だって、いっぺんはこしらえたものじゃないの？」伯父さんは頭を振ってきかなかった。

「なあに、昔からあるんだ」

「だって伯父さん、もうほかの新しい歌をこしらえることはできないの？」

「なんのためにこしらえるんだ？……どんなのだってできているんだよ。お前が悲しいときのも、くたびれたときのも、遠く離れた家のことを思うときの歌も、お前が自分をミミズのような卑しい人間だと思つてさげすむときの歌も、人が親切にしてくれないので泣きたいときの歌もあるんだ。またお天気がよく、いつも親切で笑顔を見せてくださる神さまの大空が見える楽しいときの歌もあるだよ……どんな歌だつて、どんなのだつてあるんだ。なんでわしがこしらえることなんかいるものかね？」

「偉い人になる歌は？」

お祖父さんの教訓と無邪気な夢想でいっぱいの子クリストフはきいた。

ゴットフリートは優しげにっこりした。クリストフは少しむっとした。

「なぜ、笑うのさ？」

「ああ、わしはちっぽけな行商人だ」

そう言つて、子供の頭を撫でながらたずねた。

「それじゃ偉い人になりたいかい？」

「ああ」クリストフは得意げに答えた。伯父さんはほめてくれるだろうと信じていた。しかし、ゴットフリートは言つた。

「何をするためにさ？」

クリストフは面食らつた。しばらく考えてから、

「立派な歌をこしらえるためだよ！」ゴットフリートはまた笑った。

「偉い人になるために歌を作りたいんだな。そして歌を作るために偉い人になりたいんだな。お前は尾っぽをかもうとして、ぐるぐる廻る犬みたいだよ」

クリストフは癪にさわった。いつでもからかっている伯父さんから逆にからかわれたので、ほかのときだったらとてもがまんしきれなかったであろう。ゴットフリートが理屈でやりこめてくるほど利口だとは夢にも思わなかった。クリストフはなんとかやり返したかったけれど生憎だった。

「お前、ここからコブレンツまでの距離ほど大きくなっても、歌ひとつだつてできっこないよ」クリストフはむっとした。

「こしらえたいと思つたら……！」

「思えば思うほどできないのだ。歌を作ろうと思えば、あんなにならなくちゃ駄目さ、お聴きよ……！」

輝く月がまるまると野の後ろから昇っていた。銀色の霞が鏡のように水面に浮かんで、地面にすれすれに漂うていた。蛙は語り合い、牧場ではひき蛙たちがいい音色の笛を吹きつれていた。こおろぎの冴えわたるトレモロは星の瞬きに応えていた。風は静かに楡の梢（ね）に吹いていた。川にのぞんだ丘陵からはナイチンゲールの幽（か）かな歌が流れてきた。

「何を歌いたいかい？」長い沈黙の後にゴットフリートはため息をもらした。彼は独りごとを言っているのか、それともクリストフに話しかけているのかわからなかった。

「お前がこしらえる歌なんかよりずっと上手にうたっているじゃないか？」

クリストフは今までにないしみじみした気持ちで、この夜の音楽に耳をすました。なんとはなしに伯父さんが懐かしく、かわいそうになってきた。そしてだしぬけにゴットフリートの腕に飛びかかって抱きしめた。

伯父さんは帰りに言った。

「またいつか、神さまの音楽を聴きに行こう。ほかの歌も歌ってやろう」

それから二人はときどき散歩に出かけた。ゴットフリートは草のなかに座って、じつと耳をすました後、雲や星の話をしてくれた。土の音、風の声、水のささやきを聴き分けたり、飛んだり、跳ねたり、這ったり、泳いだりする小さい動物たちの仲間の声まで聞くことを教えてくれた。また、時には悲しい調子やうれしい調子の歌を歌った。

ある晩、クリストフはゴットフリートに自分の小曲を見せようと思った。それは彼の苦心の作で得意のものだった。ゴットフリートは聴いてから言った。

「つまらんなあ！……」

「でもお祖父さんは素敵だとおっしゃったんだ……」

「お祖父さんは学者だからな……だが、わしは音楽を知らないから……」ゴットフリートはしばらく黙ってから、また言った。

「しかし、よくないと思うな」

クリストフはほかの曲を歌った。ありったけのを……するとゴットフリートは言った。

「なおまずいや！」

クリストフは泣きたかった。腹が立った。彼は泣き声で叫んだ。

「だって、なぜまずいっていうのさ？」

「なぜだって？……そりゃわからない。お待ち——うむ、そう、つまらん、なっていないよ……何も意味がないじゃないか？　なぜ書いたのかい、あんなものを？」

「知らないよ、いい歌をこしらえたかったのさ」

「それ！　だから駄目さ！　お前は偉い音楽家になるために書いたな。ほめてもらうために……それじゃ嘘の音楽

さ。音楽というものは、真情から自然に出なくちや駄目だ。ちょうど泉の水が地のなかから湧き出るような……」
クリストフはゴットフリートの言葉を怒った。憎んだ。「なあに、伯父さんなんか知るものか！ お祖父さんがもつと賢いんだもの。だから僕の作曲をほめたんだ」と考えてみても、心の底では伯父さんの方がほんとうだとかつていた。

それからクリストフは小曲を書くたびに、伯父さんの言った真情ということ忘れなかった。彼はびくびくして伯父さんの判断を怖れていた。だから「悪くないよ、いいな」などと言われると、うれしくてならなかった。

ゴットフリートはあるとき言った。

「おい、わかったかい？ お前が家で書くものなんか音楽じゃありやしない。ほんとうの音楽というものは外の清らかな神さまの空気のなかにあるのだよ」

そう言って、彼はいつもクリストフに神さまの話をして聞かせた。

(朗読家)

『ジャン・クリストフ物語』を読んで

金剛育子

昨年は「日本ロマン・ロランの友の会設立七〇年」という記念の年であった。

『ジャン・クリストフ』の少年時代を宮本正清氏が児童向けに翻案されたものを夫人の宮本エイ子氏が補訂され、このたびの記念事業の一環として新たに出版されたものが今私が手にしている『ジャン・クリストフ物語』である。

途中何度も目頭が熱くなりながら一気に読み終えた。心の琴線が震えるような一冊であった。

これまで何巻にも及ぶ『ジャン・クリストフ』を、都合のよいところをつまみ食いな読み方しかしていなかった私にとっては、自身を恥じるとともに新たに目を

開かされた思いであった。当時、母から『ジャン・クリストフ』や『チボー家の人々』は人生における若者のバイブルのような本なのだと言われていたことを思い出す。私の実家には姉や私が子供の頃読んでいた絵本や児童向けの全集が今も大切にそのまま残されている。色褪せて薄赤茶け、少々カビ臭くなっているそれらの本を手にとってみると、見覚えのある懐かしい挿絵とともに、夢中で読んだ幼い日々が甦る。当時の私にとっては本の内容もさることながら、美しく気品のある挿絵にうっとりしながらまだ見ぬ世界を想像して何度も読み返していたことを思い出す。『ああ無情』『アンクル・トム』『世界神話物語集』などなど。

新しい本が届いて、まっさらなページを開くときのドキドキした気持、そばに置いて何度も何度も読み返した楽しさ、あれから何十年も経って今こうして手にとると、懐かしい両親の面影とともに子供の頃のさまざまな情景が甦る。

翻って現代の子供たちはインターネットという機械を通じて書物に触れ、読書という行為そのものがすっかり変わってしまった。

今つくづく思うことは、子供の頃に感動したことは良きにつけ悪しきにつけ心の根っこにずっと住みついていて、その後の人生における物の考え方や生き方などに影響を与え、その人の人格の根幹を成すのではないかということだ。

まさに「三つ子の魂百まで」である。

私の母は信心深い人で、まだわけのわからない幼い私たち姉妹を仏法は毛穴から入ると言って名僧の講話や座禅の会にたびたび連れて行った。また家からほど近い教会の日曜学校にも通い、ホイヴェルス神父さまの包みこまれるような優しいお姿は今でも忘れることが出来ない。

私などがつい調子に乗ったりすると母は、いつも「謙虚な心を忘れずに」とか「事を謀るは人間にあり、事を成すは天にあり」など、はつとさせられる耳に痛いことをよく言って戒めた。しかし言うは易し行うは難しで、この歳になった今でも私はいまだに悩み迷う煩惱まみれの日々を過ごしている。

人生の黄昏時を迎えた私にとって、『ジャン・クリストフ物語』の中でも特に心惹かれ、共感をもって何度も読み返してしまうのはゴットフリートとの場面である。彼はクリストフに言う。「偉い人になるために歌を作りたいたんだな：思えば思うほど出来ないのだ：またいつか神さまの音楽を聴きに行こう：音楽というものは真情から自然に出なくちゃ駄目だ。ちょうど泉の水が地の中から湧き出るような：」

実際ベートーヴェンなどの心を揺り動かされる音楽を聴くと、この曲は人の手によって作り出された音楽というよりは、むしろその作曲家に神さまが天から降りてこられたのだと思わずにはいられない時がある。

「宇宙や自然の中で人は謙虚であれ」『ジャン・クリス

『トフ物語』の中には現代社会を生きる私たちにこそ必要な強烈なメッセージがいたるところにちりばめられている。そして古今東西、人として誰もが避けては通れない永遠のテーマ、この世で本当に大切なものとは何か？人が生まれてきて死ぬということとは？を問いかけている。

宗教も音楽や絵画などのさまざまな芸術も、そして私がかつて携わっている日本の古典芸能である能楽も皆、この永遠のテーマを追い求めているのではないだろうか。

願わくば一人でも多くの子供たちに『ジャン・クリストフ物語』と出会ってほしい。

そして最後に、御主人の遺志を引き継がれ、京都銀閣寺の地にてロマン・ロランの精神の灯を絶やすことなく立派に未来に向けて発信されている宮本エイ子氏に心からの敬意と感謝の気持ちを捧げたい。

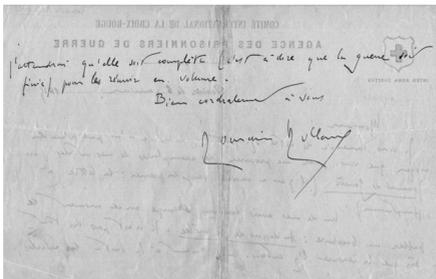
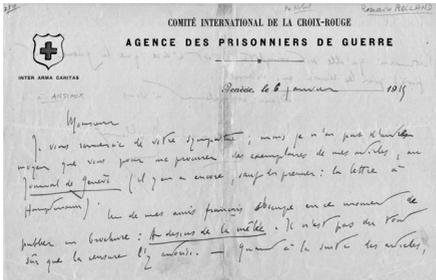
(公財)金剛能楽堂財団・業務執行理事

万人に抗して

— ロマン・ロランとアメデ・デュノワ

国際赤十字・戦争捕虜事務局の便箋に書かれた一九一五年一月六日付の自筆書簡で、ロランは「目下のところ私のフランスの友人の一人が、小冊子『戦いを超えて』の発行に力を尽くしてくれています。それが検閲を通るかまいったく分かりませんが」と綴っている。

ここで言及されている「フランスの友人の一人」とは、時期・内容から考えて、ジャーナリストのアメデ・デュノワのことだと思われる。デュノワはロランと同じクラムシールの出身。当時、彼はロランの論文「戦いを超えて」と「戦争中の慈善」に自らの序文を付けた小冊子を発行しようとしていた。



ロランの自筆書簡 (1915年1月6日付)

植松晃一

小冊子の発行は、デュノワの自発的な計画だった。ロランの『戦時の日記』には、デュノワからの書簡が記録されている。

『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』紙はフランスにはほとんど配布されておらず、フランスの新聞はもちろんあなたの論文を再録しようとはしなかったのです。したがって、その論文の安価な小冊子をつくる必要があります。あると思われる。もしあなたもそうお考えなら、私にそうおっしゃって下されば、私がこしらえます」(一九一四年二月の日記から)¹

ロランの論文「戦いを超えて」は、一九一四年九月二二・二三日号の『ジュルナル・ド・ジュネーヴ』紙の付録として世に出た。ロラン研究の大家ベルナル・デュシャトレは「その控えめな筆致にもかかわらず、フランスでは憤慨の渦が巻き起こった²」としている。フランスではほとんど配布されなかったにもかかわらず、人々の神経を逆なでしたようだ。

戦争に反対していた政治指導者ジャン・ジョレスがパリで暗殺されたのは一九一四年七月三十一日のこと。その

翌日にはフランスとドイツで総動員令が発令され、戦争が始まった。八月二〇日にはドイツ軍がベルギーの首都ブリュッセルを占領。破竹の勢いでパリのすぐ北にまで迫り、フランス政府は九月二日、ボルドーへの遷都を決めた。五〇万人もの市民がパリを脱出したという。フランス軍は同六日からの「マルヌ会戦」に勝利し、ドイツ軍を押し戻したものの、フランス北東部ランスの街の北側で戦線が膠着。ドイツ軍は同一九日にランス大聖堂を砲撃・破壊した。³

こうした状況下でスイスにいたロランは「おお、世界の英雄的な青年たち！ なんとという浪費的な欲びをもって、彼らはその血潮を飢え渴いた大地にそそいでいることか⁴！」と、「戦いを超えて」を書き出す。「身を犠牲にしよう」と熱中するこの青年たち、彼らの天晴れな献身にたいして「社会の指導者層が与えた目標は「若い英雄たちの殺し合い」だった。ロランは、欧州各国のエリートが戦争を防ぐために何もしなかったばかりか、薪を運んで火事を煽り立てている事実を指摘し、「祖国愛というものは、他の祖国を憎み、他の祖国を守る人々を虐殺す

り戻そう」と綴っていたそのとき、彼の盟友シャルル・ペギーはドイツ軍の銃弾を額に受けて死んでいたのだ。

フランスには、領土を奪いに来た外敵から祖国を守るための戦いだという明快な大義があり、一八七〇年の普仏戦争に敗れた遺恨もある。社会の担い手が戦争を知らない世代になっていたことも、ロランの言う「肉食獣の英雄主義の誇り」をほびこらせ、戦争に反対しにくい空気を生み出す一因になったのかもしれない。

しかしロランは、現実から遊離して抽象的な観念をもてあそぶ傍観者だったわけではない。志願して国際赤十字の戦争捕虜事務局で働き、非戦闘員の捕虜とその家族との仲介役を務めた。危機の時代における欧州の魂の歴史を後世に残すため、新聞・雑誌や自身に寄せられる手紙などを整理して『戦時の日記』に記録した。さらにドイツ軍によるランス大聖堂の破壊などを受け、戦争に抗議する自由な精神の一団を形成しようとした。ランス出身で「詩王」と呼ばれていたポール・フォールは次のように書いた。

「破壊された大聖堂の状態を知っていますか？ この

攻撃に対する欧州各地の思想家による抗議を集めたパンフレットを発行することになりました。あなたの抗議文と一緒に、この抗議に参加したいパリの詩人や芸術家の署名を送ってもらえませんか？」（一九一四年一〇月一三日付）^⑤

ロランの呼びかけに対し、ロダン、ストラヴィンスキー、クローデルなど多数の名士が賛意を表した。それにもかかわらず、ロランが大多数の世論の非難中傷にさらされたのは、ドイツ人を主人公とする小説（『ジャン・クリストフ』）を書いていたことや、ロランの主張が断片的に、あるいは不正確な伝聞で広まったためかもしれない。もともと、自らロランの論文を読もうともせず、メディアの悪評をうのみにしていた人が相当数いたことはロランの日記からも伺える。

「ひたすらに正直である人間のことを——あえて調べてみようともせず——新聞で悪く書きたてる、下種きわまる人間たちの言葉を、なんと愚かしくも人が信じこむことかと、私は感嘆するくらいだ。前に述べたパリの医師は、私をののしってからこう言っている、「私はあ

なたのものは何も読んでいない。私にはその暇がないのだ。けれども『ル・マタン』紙が語っていることだけで、あなたのことはすっかり分る。……」——そういう人間たちを軽蔑せずにおられようか。自主的な知性を持っている人間がなんと少ないことであろう。彼らは他人の言いなりになってものを考えている」(一九一四年一〇月の日記から)⁽⁶⁾

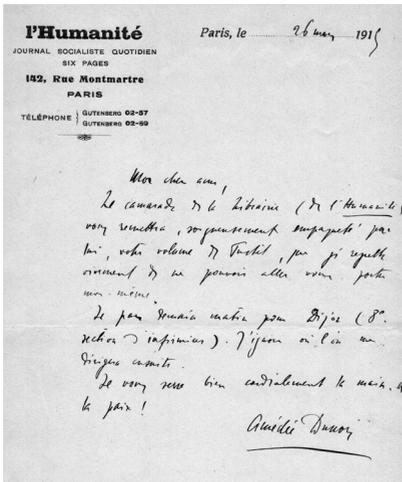
こうした状況があつたからこそ、デュノワは小冊子発行の必要性を感じたのではないか。

小冊子の発行は容易ではなかつた。一九一五年二月から検閲を受けたが、なかなか許可が下りない。発行できないまま、デュノワは軍に動員されてしまう。

「政府は自分の邪魔になる独立不羈な人びとを厄介払いする巧妙な方法を考え出した。すなわち、彼らを動員するのである。デュノワは次のことを書き送ってきた(三月二六日)——「親しい友よ、私は動員され、明日デュージョンの第八看護兵隊に向けて出発します。どんなことがあると、パンフレットは出版されるでしょう。すべ

ての準備は整っております」(一九一五年三月の日記から)⁽⁷⁾
私の手元にも同じ日付で似た内容のデュノワの自筆書簡がある。第八看護兵隊に出発することを伝えるとともに、後のことはリュマニテ社の同志が手配する等と書かれている。

検閲がようやく小冊子の発行を許可したのは約四カ月後、「戦いを超えて」をほぼ全文再録した評論家アンリ・マシスの小冊子『フランスに敵対するロマン・ロラン』が出た後だった。



デュノワの自筆書簡
(1915年3月26日付)

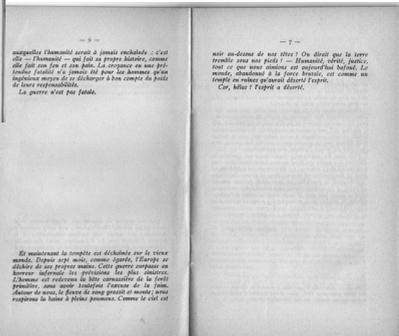
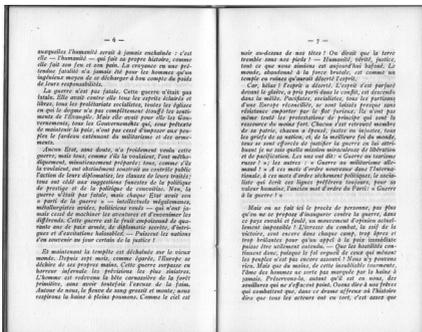
マシスは検閲とつながりがあったようだ。先んじてロラン批判の小冊子を出すことで、デュノワの小冊子の影響を最小限にとどめようとしたのかもしれない。マシスはロランの論文等を引用しながら、フランス人の兄弟たちが戦場で死んでいるのに、ロラン氏は自らの良心を満足させるためにスイスへ逃れている。あまりにも寛大な魂を宿しているので、祖国だけを愛することができないのだ」といった調子で批判した。

検閲を経たデュノワの小冊子は、ロランの表現を借りれば「手足をもぎとられて」いた。「(デュノワの)序文二二三行のうち一二〇行が飛んでしまった——「つまり、重要なところは全部です。」私の文章も切り取られている(中略)けれどもデュノワは、ただ友人たちにもみ手渡すべき、検閲なしのものを一五〇部つくった」(一九一五年六月の日記から)⁽⁸⁾

私は昨年、この検閲を通していない無削除版の小冊子を手に入れた。デュノワの序文から検閲に削られた部分をかいつまんで読んでみると、何よりも戦争屋に抗議

する。鉄と火により、大陸と海とを越えて血まみれの道を開く帝国主義の犯罪者たち。力の均衡による平和という幻想は、不和の理由を招き、脅威を増大させただけだ。あたかも望んだものであるかのように、すべての国が戦争を綿密に準備した。剣を前にして精神は嘘をつき、紛争の一部を担っている。いったい戦争はいつまで続くのだろうか。うぬぼれた信仰は人々を飽きさせない。人々の魂が永遠の憎しみに染まらないうにしよう。戦う兄弟たちにあえて言う。もう十分に人々はぶつかり合い、砕けた。私たちの精神は(戦いを超えて)立ち上がらなければならぬ。今はまだ無力だが、自由な良心を持つ人々にこの小冊子を捧げる。私たちは一人ではない」といったことが情熱的に綴られている。

挙国一致体制をつくりたい人たちにとって目障りな文章だったのだろう。戦時体制に移行してからの反戦・抵抗の難しさを改めて感じた。それと同時に、わずか三二ページの小冊子のために、戦争を望む万人に反対し、憎まれることになったとしても、ロランの声を広く伝えようとしたデュノワの勇気と熱情に打たれた。



デュノワが出した小冊子
(上が無削除本、下が検閲済みの削除本)

一九一五年一月、ロランは「戦いを超えて」をはじめとした戦争を糾弾する一六の論考などを一冊にまとめ、オランドルフ社から単行本『戦いを超えて』として出版した。ロラン自身の報告によれば、フランスの全新聞と書店のボイコットにもかかわらず、この本は出版からわずか一〇日間で一万五〇〇〇部が売れ、一カ月余りで五〇版を重ねた⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。ロランに対する非難中傷はやまなかつたが、最前線の兵士から、また日本を含む各国から、自由な精神の共感と苦悩の声が彼のもとに集まるようになる。

「この『戦いを超えて』によって、ロマン・ロランは裁かれ、愛され、憎まれもした。これらの有名な論文が発表されるや、もはや誰も無関心でいたり、知らぬ顔をしてゐるわけにはゆかなかつた。人々は、あるいは裏切者を憎みはじめ、あるいは《不吉な一時代における精神の自由な象徴》(ピエール・ジャン・ジュヴ)とみなして、その人を尊敬しはじめたのである」(モーリス・デコト) (詩人・ライター/賛助会員)

文献

- (1) みすず書房『ロマン・ロラン全集27』所収「戦時の日記I」片山敏彦ほか訳
- (2) ベルナル・デュシャトレ著、村上光彦訳『ロマン・ロラン伝』みすず書房
- (3) 大橋尚泰著『フランス人の第一次世界大戦』えにし書房
- (4) みすず書房『ロマン・ロラン全集18』所収「戦いを超えて」宮本正清訳
- (5) AUTOGRAFES DE ROMAIN ROLLAND. RELEVÉS ET COMMENTAIRES PAR BERNARD DUCHATELET
- (6) みすず書房『ロマン・ロラン全集27』所収「戦時の日記I」片山敏彦ほか訳
- (7) 同右
- (8) 同右
- (9) みすず書房『ロマン・ロラン全集37』所収「二人が出会う ジャン・リシャル・ブロック ロマン・ロラン往復書簡」宮本正清・山口三夫訳
- (10) みすず書房『ロマン・ロラン全集35』所収「したいソフィア」宮本正清・山上千枝子訳
- (11) モーリス・デコート著、渡辺淳訳『ロマン・ロラン』理想社

天狼を悼む

— フー・ツォン追悼

私が初めてフー・ツォン先生の演奏を聴いたのはまだ高校生の頃、それはシヨパンのマズルカの録音でした。心に衝撃を受けました。マズルカから香り立つ未知の土地の空気に魅了されました。京都の音楽サロン、京大の化学の研究者、新宮春男先生と奥様のお宅で聞かせていただきました。その頃の私は音楽を志すものの、アジア人が西洋音楽をすることについて不安を抱いていました。しかしそれは一掃されました。非西洋人としてアンドレ・ワッツさんとフー・ツォン先生の音楽が憧れとなりました。

その後まもなく、遊学したフランスで降り立った鉄道の駅の売店でフー・ツォン先生の写真がプロマイドして

売られているのを見て、一人勝手に誇らしく感じました。入学した国立ニース音楽院のソルフェージュの先生はよく「フー・ツォンの弾き方！」と喋って演奏と動きを真似て見せてくれました。もちろん深い尊敬をもつてのことです。

二〇代前半に夏期講習の指導でロンドンにいた折、フー・ツォン先生のお宅に私がミラー的なファンだったピアノのアルゲリッチさんが来られるというので、そのパーティーに紛れ込ませていただき、そこでも貴重なアドバイスをいただきました。

数十年を経てロマン・罗兰研究所でフー・ツォン先生の招聘計画をお聞きし、私は初めてその御父上の偉業

西 垣 正 信

とドラマを知りました。その京都でのコンサートにフリー・ツォン先生がハイドンを選ばれたことに少しの不安を感じました。多くの巨匠たちはその生涯の最後のコンサートにハイドンのプログラムを選ぶことが多いのです。演奏会では私は幸運にも舞台袖で働く仕事を頂きました。

舞台袖に立つ私の足下、反響版の隙間から先生から放たれたハイドンの影が生き物のように這ってきました。ステージから暗い袖に戻られた先生はそこで待つ私に「君はくみたいにミスタッチしちゃだめだよ！でも、それより大切なこともあるんだ！人生にはミスタッチもあるさ」。

このように私の人生のさまざまな機会にいつもフリー・ツォン先生の音楽は在り続けました。フリー・ツォン先生、ありがとうございます。

(ギタリスト)

フリー・ツォン（一九三四―二〇二〇）

一九三四年上海生まれ。著名なフランス文学者・翻訳家傅雷（一九〇八―一九六六）の息子。七歳からピアノを始める。一九五三年上海交響楽団との共演で「ベートーヴェンピアノ協奏曲第五番」（皇帝）でデビュー。一九五四年ポーランドへ留学、この間の父子の往復書簡が日本では『君よ弦外の音を聴け』のタイトルで翻訳され、二〇〇四年に出版される。一九五五年の第五回シヨパン国際ピアノコンクールで東洋人として初めて三位入賞、併せてマズルカ賞を受賞。一九五九年からロンドンを拠点に世界的に演奏活動、エリザベット王妃国際ピアノコンクール、シヨパン国際ピアノコンクールなどの審査員。タイム誌で「今日のもっとも偉大な中国人音楽家」と評された。

ヘルマン・ヘッセは、フリー・ツォンこそシヨパンを正しく演奏できる唯一のピアニストであると折り紙をつけた。ほかに、モーツァルトのピアノ協奏曲やドビュッシーのピアノ曲でも独自の解釈を見せていた。

一九六〇年代の中国の文化大革命時の混乱で父傅雷は迫害を受け、母とともに悲劇的な自死に追いやられる。そのため二〇年以上、祖国に足を踏み入れられなかった。その後、政治的回復に至り一九七九年以降、毎年帰国し、北京、上海などの各地で演奏会を開催し、大成功を取めながら後進の指導にもあたった。

日本では一九八〇年度『レコード芸術』誌のレコードアカデミー賞受賞、近年は別府アルゲリッチ音楽祭にも参加していた。

新役員一覧

令和二（二〇二〇）年、任期満了につき改選され重任、新任を含む理事、評議員、監事は次の通りです。

理事長

西成 勝好

理事

清原 章夫

シツシュ・ダイダイエ

立木 康介

四宮 ころ

長谷川 治清

宮本 エイ子

能田 由紀子

和田 義之

監事

福田 由美

村田 まち子

評議員

奥村 一彦

久保 久子

シツシュ由紀子*

中田 裕子

森内 依理子

守田 省吾

*シツシュ由紀子さんは令和二年二月二八日死亡。

短 信

*稲畑産業株式会社代表取締役社長 稲畑勝太郎さん お
祝い。フランス共和国大統領から日仏交流の功績によりレ
ジオン・ドヌール、シユバリエ勲章を受章されました。

稲畑家は一九二七年以来、ポール・クロードルとともに
旧関西日仏学館（現アンスティチュ・フランセ関西）設立
に寄与されました。当庭園には曾祖父勝太郎氏の立像があ
ります。四代にわたり世情に変わらぬフランスへの貢献が
認められたものです。私もロマン・ロラン研究所にとつ
てもかけがえのないご援助を変わずにいただいております。
日仏友好の確たる証です。

*徳永勲保さん いつもながら毛筆で認められた巻紙で書
状を頂きました。日経新聞の特集版（ペートルヴェン）特
集と藤原書店の冊子『機』が同封されています。

「ペートルヴェン生誕二五〇周年の年も終わろうとして
います。二〇代初めに大原美術館で見たブルーデルの
『ペートルヴェン像』は圧倒的でした。二階ホールの中央
に置かれ当時は「風に向かうペートルヴェン」の題名だつ
たと思うのですが、傍らの皮の長椅子に座り長い間向き
合っておりました。私の到達した非日常、非常識の世界と
ロランの評価と通底するものを感じます。藤原書店の『機』

に掲載の新保裕司氏の論考ご参考に。——「……ペートル
ヴェンが、近代によつて近代に勝つたのは、ソナタ形式と
変奏曲を絶妙に組み合わせた傑作を書いたことにあるよう
に思う。ロマン・ロランの『ペートルヴェンの生涯』の中
の「ペートルヴェンの思想断片」の「音楽について」の冒
頭に、「さらに美しいためならば、破り得ぬ（芸術的）規
則は一つもない。」とある。ここの「規則」にソナタ形式
を考えてもいいだろう。……」と。

*山本和枝さん コロナ禍の今、強烈に思い出すことがあ
ります。ロマン・ロラン研究所とはどんな空間にどんな人
が集い、どんな発表がなされているのか期待と緊張をもち
ながら初めて訪れた時のことです。その時は『ジャン・ク
リストフ』が読まれていました。出席の方々の感想、意見
などが発言された中で一人の男性がロランの本との出会い
を話されました。終戦直後のご自分の心のうちを話されま
した。その言葉が私の心を震わせました。

物質的なもの、知的なこと、芸術などから、希望、そし
て生きる意欲さえも失い、さ迷っていた時に、古本屋の店
頭に皮表紙のロマン・ロランの本が目に入り、どれだけの
時間かはわからないが、そこで読んでいたそうです。そし
ておっしゃいました。言葉を詰まらせながら、「もう一度、
もう一度、生きてみよう」これが、私の初めてのロラン研

究所との出会いです。

もうずいぶん昔のことですが、その頃、研究所にはみんなを勇気づける雰囲気があった。そして、時を経てコロナ禍の今に至っていることをしみじみと感じています。

*安木由美子さん 俳優・宝田明氏の著書『送別歌』(二〇二一年一月二七日刊)の構成を担当いたしました。出版元のユニコ舎は、後世に読み継がれるメッセージ集の刊行を理念とし、二〇二〇年に立ち上げられた小さな出版社です。宝田氏は小学生の時に満州で終戦を迎え、引揚者としての苦勞を乗り越え俳優として活躍されてまいりました。本書では六五年に及ぶ俳優人生だけでなく、自らの体験を通して戦争の悲惨さ・不条理さを語り、多民族の共存、平和への願いを強く訴えています。ロマン・ロランの反戦、友愛の思想は時代を超え、民族を超えた真理であるとあらためて感じます。「不戦不爭」。宝田氏から私の手元に送られてきたサイン本には、そう、ひと言葉添えられていました。この言葉を心に刻み、これからも過去の過ちに向き合い、伝える仕事を続けていきたいと思っております。

読書会報告

『ジャン・クリストフ』——家の中——要約と朗読。

コロナ禍のため第三七六回―三七八回(通算・五五三)、二〇二〇年六月二七日、九月二六日、二〇二一年三月二七日で三回。通算参加者二一名。

寄贈図書

フランス ロマン・ロラン協会

- 1、冊子 二〇二〇 カイエ四五号、二〇二一 カイエ四六号
- 2、*Romain Rolland et Jean-Richard Bloch Correspondance (1919 - 1944)*. Edition établie par Roland Roudil et Antoinette Blum

西垣正信氏

- 1、CD DOMENICO SCARLATTI 14 SONATAS

十 訃報 十

田代 輝子さん

二〇二〇年一月六日 多発性骨髄腫でご逝去。享年七七。

夫君が豊山派長谷寺の化主として在任中、内部資料に詩人大使ポール・クロードルが当寺院へ来山されたことが記されていることを教えてくれた。クロードルは長谷寺の牡丹に呼びさまされ、作品「百扇帳」に投影した。クロードルはのちに「ロマン・ロラン友の会」の初代会長になった。輝子さんは私たちのロマン・ロラン巡礼旅にもたびたび参加され、人と人の縁に生前深い感銘を示していた。恵まれた環境で老醜を見せることなく旅立った。合掌。

谷口景子さん

二〇二〇年一月一〇日 心不全でご逝去。享年九二。陶芸家夫人として家庭を支え夫良三氏亡きあと、自らも雅風の名で作品を作った。ロランの和みの会にはよく参加して下さった。合掌。

フリー・ツオンさん

二〇二〇年二月二八日 新型コロナウイルス感染症のためロンドンでご逝去。享年八六。合掌。本号に追悼文掲載。

シッシユ 由紀子さん

二〇二二年二月二八日 病のため帰らぬ人となった。享年五九。学術的シンポジウムには欠かせない優れた同時通訳者として活躍中であり、日仏文化交流の多大な貢献者だった。京都市、京都府からはじまり、アンステイチュ・フランセ関西はもとより当研究所では評議員として常に在った。フランスロマン・ロラン協会からも哀惜の電話やメールが寄せられ深い悲しみとともにその損失は言葉に尽くせない。死の前日の言葉は「ロマン・ロラン研究所のお手伝いができなくてごめん」だった。宇宙のきらめく星への BON VOYAGE。さよ旅を！

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六―一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの眞の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、眞に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頽廢から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なもの、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

- 講演会
- 読書会・研究会
- 機関誌『ユニテ』発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

- ロマン・ロランの著作に感動、また
- 彼の周辺の芸術家たちに興味、
- あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
- いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。
- 特典Ⅰ①機関誌『ユニテ』の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。
- 会員Ⅰ一般賛助会員は年会費一口五千円から。特別賛助会員は年会費十口以上。

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七一	5・15	ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映）	宮本 正清	4・20	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	6・9	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七二	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂彌	9・29	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	11・17	ロマン・ロランとの出会いから	尾埜 善司・今江 祥智
12・18		私の人間観	末川 博	1・27	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	新村 猛
一九七四	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	6・2	ロマン・ロランとガンディー	森本 達雄
12・5		ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木斐夫	9・26	『魅せられたる魂』と私	樋口 茂子
			演奏…玉城 嘉子	10・26	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	小尾 俊人
一九七六			演奏…玉城 嘉子	11・30	ロラン・片山・ヘッセ	宇佐見英治
7・11		ロマン・ロランとゲートル ユダヤ民族と西洋文明	岡本 清一	一九九一 3・1	ロマン・ロランと私	松居 直

4・19	(財) ロマン・ロラン研究所設立二十周年記念 レクチャー・リサイタル 杉田 谷道	10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子
6・4	ベートーヴェン後期ピアノ・ソナタの夕べ ロマン・ロランとベートーヴェン 青木やよひ	1・28	いま、ロマン・ロランを語る 尾埜 善司・今江 祥智	
9・27	ロマン・ロランとデュアメル 村上 光彦	9・9	ロマン・ロランと音楽 中野 雄	
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性 兵藤正之助	10・14	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ B・デュシヤトレ	
11・29	初めにロマン・ロランあり 岡田 節人		ロランとフランス革命 河野 健二	
一九九二			自然科学とゲーテ 岡田 節人	
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端 岩田 慶治	12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽 ベートーヴェン、デュカ他作品 岡田 暁生	
9・25	ロマン・ロランとイタリヤ 戸口 幸策		おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日まで」 で 今江 祥智	
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔	12・24	ピアノ演奏…小坂 圭太	
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会 ピアノ演奏…山田 忍		映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	
	静かにやさしき顔 佐々木斐夫			
	不思議な静けさ―宮本正清の世界 小尾 俊人			
一九九三		一九九五		
1・29	自伝的諸作品について 佐々木斐夫	1・27	ロマン・ロランと日本人たち 小尾 俊人	
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男	6・2	私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智	
5・24	ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄	11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺 岡田 暁生	
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前) 重本恵津子			

一九九八	ロママン・ロランとの出会いから	鄭 承姫	10・30	ロママン・ロラン記念コンサート	
6・14	レクチャーコンサート	岡田 暁生		ピアノ演奏…小坂 圭太	
11・16	ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番	北住 淳	11・25	レクチャー…岡田 暁生	
11・18	「戦間期のリベラル」経済学から見たロママン・ロラン	本山 美彦	1999	ロママン・ロランと大佛次郎	村上 光彦
一九九七	「主体的精神と普遍的人間愛」ロママン・ロランと	區 建英	6・11	ロランと音楽	岡田 暁生
1・17	魯迅	岩淵龍太郎	10・8	「日本ロママン・ロランの友の会」五十周年記念	園田 高弘
6・6	わが青春と一生	福田 真人	12・1	園田高弘ベートーヴェンを弾く	園田 高弘
9・19	ロママン・ロランと結核の時代	眞人	10・13	お話とピアノ演奏	森本 達雄
10・4	ピアノとチェロのための夕べ	北住 淳	2000	ロママン・ロランとインドの精神	佐々木斐夫
	ピアノ演奏…北住 淳		2001	ロママン・ロラン没後五十五年と日本	
	ロママン・ロラン記念コンサート	小川剛一郎	2・23	ロママン・ロランと〈老いの豊かさ〉	青木やよひ
	チェロ演奏…小川剛一郎			シンポジウム	今江 祥智
一九九八	ロママン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫	6・23	(財)ロママン・ロラン研究所設立三十周年記念	尾埜 善司
6・8	ロママン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 図近		コンサート	神谷 郁代
9・25				神谷 郁代	ベートーヴェンを弾く

- 12・21 ロマン・ロランとヴィクトル・ユゴー
二〇〇四
『きょう』を読む『京都、半鐘山の鐘よ 鳴れ!』
朗読とおはなしの会
おはなし 尾埜 善司 朗読 村田まち子
- 二〇〇二 4・20 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ
7・16 ロマン・ロラン記念サマーコンサート
ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ
ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ
- 11・11 ロマン・ロランの後継者たち 蜷川 謙
9・11 抗日中国における中仏文化交流
中国の知識人はロマン・ロランをどのように評
価したか 内田 知行
- 二〇〇三 4・19 ロマン・ロラン記念スプリングコンサート
ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ
二〇〇五 1・29 現代の法とヒューマニズム
加古二郎と瀧川事件 園部 逸夫
- 5・10 ロマン・ロランの作品による音楽とレコード
尾埜 善司
6・12 ロマン・ロラン没後六十年記念コンサート
梅原ひまり 神谷郁代デュオ
ヴァイオリン演奏…梅原ひまり
ピアノ演奏…神谷 郁代
- 5・31 戦争と平和、科学を考える
ブリーモ・レーヴィを語る
ジル・ド・ジェンヌ
6・25 生々発展する魂
ゲートとベートーヴェンそしてロマン・ロラン
青木やよひ
- 11・22 ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える
峯村 泰光

- 10・29 交差する肖像
 ロマン・ロランとクロードル
 J・F・アンス
 通訳 原口 研治
 10・13 中国研究を通しての日仏交流
 京大シノロジーの創始者狩野直喜の場合
 狩野 直禎
- 二〇〇六 戦間期ヨーロッパとロマン・ロラン
 山口 俊章
 二〇〇八
 3・8 『ピエールとリュース』を演出して
 今藤政太郎
- 二〇〇七 日本におけるロマン・ロラン受容史
 デイ・デイ・エ・シツシユ
 通訳 シツシユ 由紀子
 6・28 中国におけるロマン・ロランの紹介者・傅雷
 榎本 泰子
- 1・20 琴 笙 ヴァイオリンによる新春コンサート
 大谷 祥子
 9・16 前理事長尾埜先生への感謝の会・記念講演
 ロマン・ロランと日本人たち 尾埜 善司
- 2・3 歌と朗読の会
 豊 剛秋・増永雄記
 10・4 ロマン・ロラン国際平和シンポジウム
 宮本正清の詩『焼き殺されたいとし子らへ』
 「わらい」朗読 尾埜 善司
- 7・21 朗読の会
 第一次世界大戦とロマン・ロラン
 尾埜 善司 ほか 会員
 フランソワ・ラベット
 ロマン・ロランが愛したベートーヴェン
 ピアノ演奏…神谷 郁代

- 二〇〇九
- 2・7 朗読の会とピアノ演奏『ジャン・クリストフ物語』
ピアノ演奏…岩坂富美子
- 6・13 「日本ロマン・ロランの友の会」六十周年記念
レクチャー・ギターコンサート 西垣 正信
フー・ツォン ピアノリサイタル
犠牲の宗教への問い 高橋 哲哉
- 10・24
- 二〇一〇
- 7・24 小林多喜二とロマン・ロラン——反戦・国際主義
の文学を求めて エヴリン・オドリ
- 9・29—10・3 一九五三年のフランスの子供の絵特別出品(京
都市幼児・児童・生徒作品展及び姉妹都市交歓
作品展)
- 10・9 ピアノリサイタル 神谷 郁代
- 二〇一一
- 2・19 朗読の会 トルストイ没後一〇〇年記念『トルス
トイの生涯』『伯爵様』 会員たち
- 二〇一一
- 11・19 フロイトとロラン——災厄の後に、幻想の前で
小森謙一郎
- 二〇一二
- 1・27 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——京都会場
講演「ジャン・クリストフ」を読みかえして
村上 光彦
- 3・5 朗読の会
スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ・カミヤマ
守田 省吾
- 3・29 『ロマン・ロラン伝』翻訳・出版記念会
小尾俊人氏へのオマージュを込めて——東京会場
琴とヴァイオリン合奏
アンネットとシルヴィ 会員たち
- 2011
- 春の海 宮城道雄 作曲
夢のあと フォーレ 作曲

7・28

朗読の会『魅せられたる魂』

アンネットとシルヴィ

於 ロマン・ロラン研究所

10・20

ロマン・ロランと賀川豊彦

濱田 陽

二〇二三

ヴィヴェーカーナンダ生誕一五〇周年記念

6・22

スワミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯と

メッセージ

スワミー・サティヤローカーナンダ

7・6

〈朗読とピアノ〉 オマージュ宮本正清

〈朗読〉『戦時の日記』『ジャン・クリストフ物語』

詩集『焼き殺されたいと子らへ』

朗読 会員たち

〈ピアノ〉

岡田 真季

作曲 ポール・デュパン

曲目 『ジャン・クリストフ』

11・16

世界遺産ヴェズレー ロマネスク芸術の宝庫

アンドレ・アンジェイ・グルシエフスキ

二〇一四

9・26

シター演奏と朗読

シター演奏

朗読 『ピエールとリュース』など 会員たち

中川 啓子

11・1

第一次世界大戦一〇〇年とロマン・ロラン没後七〇

年記念 I・F〈読書の秋〉共催

第一次世界大戦下の知識人——アランとロマン・

ロラン

久保 昭博

二〇一五

9・19

戦後七〇年と憲法九条の意義

曾我部真裕

11・28

ロマン・ロラン〜聞き手として、証人として

『ヴェズレー日記（一九三八—一九四四）』をめ

ぐる考察 デイデイエ・シツシユ

通訳 シツシユ 由紀子

二〇一六

ロマン・ロラン生誕一五〇年&財団法人設立四五周年記念事業

10・8

朗読会 読んで聴かせる『ジャン・クリ物語』

——ピアノ演奏付き——

朗読 村田まち子ほか会員
ピアノ 岩坂富美子
講演会 ガンディー&ロランの存在から今の世界
を読み解く

宗教学者、山折哲雄先生に聞く

山折 哲雄
聞き手 濱田 陽

二〇二七

1・28 コンサート 箏とギター、ヴァイオリンとチェン

バロで聴くベートーヴェン

大谷 祥子、西垣 正信
大谷 玲子、塩地加奈子

会場 金剛能楽堂

レセプション 京都ガーデンパレスホテル

戦争と文学 桑原武夫「第二芸術論」から見た戦

後日本 大浦 康介

12・9 ロマン・ロラン、二〇世紀におけるユゴー的作家

ダイダイエ・シツシュ

二〇一八

6・9 日本国憲法の立憲平和主義と自民党改憲草案の間

題点 山内 敏弘

10・20 ポール・クロードル生誕一五〇年記念「ユニテと
共同出生」 中條 忍

二〇一九

日本ロマン・ロランの友の会七〇年記念

10・8 イリーナ・メジューエワ ピアノリサイタル
ベートーヴェンを弾く

イリーナ・メジューエワ

イリーナ・メジューエワと西成理事長の対談付き

11・30 時代の流れにあらがって——大河小説の可能性
会場 京都コンサートホール

野崎 敏

二〇二〇

10・25 『ジャン・クリストフ物語』朗読とヴァイオリン

演奏 朗読 村田まち子

ヴァイオリン 都呂須七歩

ピアノ伴奏 桑原日菜子

二〇二〇年度 賛助会員、寄付者名簿 (アルファベット順・敬称略) *特別会員及同等寄付者

安倍 道子	阿部 力	有馬通志子	酒井 保子	坂谷 千歳	佐久間啓子	佐々木雅子
シッシユ・D・由紀子	福田 幸子	福田 由美	下郡 由	四宮ころ	所司 育代	園部 逸夫
藤野 志織	古家 和雄	古田 武司	五島 清子	鈴木 明子	立木 康介	高砂子通子
長谷川和宏	*長谷川治清	濱田 陽	林 千恵子	谷口 景子	谷口 良則	田代 輝子
(一財)本願寺文化興隆財団理事長(大谷 暢順)				徳永 勲保	東野 孝人	月ヶ洞晶子
池垣 勇	今西 良枝			植松 晃一	上西 妙子	馬木 紘子
*稲畑産業株式会社(稲畑勝太郎)		*稲畑 勝雄		和田 義之	八木美佐子	安木由美子
石川 梢一	*伊藤 朝子	*井上 幸子	岩坪嘉能子	山本 和枝	山下 雅子	柳父 罔近
加茂 宣子	加藤富美子	河合 綾子	木下 洋美			柳田 基
清原 章夫	金剛 育子	金剛 永謹	小西 卓明			
久保 建夫	久保 久子	黒柳 大造	松田有美子			
峯村 泰光	*宮本エイ子	森本素世子	*森内依理子			
守田 省吾	村上 葉	室谷 篤男	村田まち子			
村山香代子	永易 秀夫	永田 和子	中村 信子			
中田 裕子	西村 秀美	西村 昭子	*西成 勝好			
西尾 順子	乗金 瑞穂	能田由紀子	岡部 素行			
大川起示子	奥村 一彦	奥村 令子	小尾 眞			
折田 忠温	大谷 祥子	ロマン・ライブ(河内 誠一)				

『ユニテ』編集を終えて

『ユニテ』48号をお手元にお届けします。

昨年この欄でコロナウイルス・パンデミックの現状の一端について書きましたが、一年後の今も事情は変わっていません。不都合でしんどい日々が続きますが、それまでの日常では見えなかったこと、気づかなかったことについてじっくり考えるいい機会だ、くらいに思うようにしたいものです。日常生活から世界情勢まで、コロナウイルスが媒介となつてあぶり出されてきたさまざまな課題が、皆さまの今後の人生のひとつの糧になりますように。

二〇二〇年はベートーヴェン生誕二五〇年にあたり、私どももロマン・ロランと関連づけたイベントなどを考えていましたが、『ユニテ』の構成も例年どおりというわけにはいきませんでした。今号の前半部分は、ロランのベートーヴェン論の一部を筆頭に、園田高広さんの一文など、かつて『ユニテ』でベートーヴェンについて書かれたものを中心に再掲載することにいたしました。例年とは異なるかたちになります、どうかご了承ください。

皆さまのご自愛をお祈りします。

(守田省吾)

シッシユ由紀子さんがあまりに早く逝ってしまい、その喪失感が大きくなかなか立ち直れないまま編集作業を進めました。彼女がしてくださっていた役割を夫シッシユ氏が引き継いでくださいました。またパリ在住の令息ケン氏はロマン・ロランに興味を示され、『ジャン・クリストフ』を購入して読み始めると言い残し、京都を後にしました。未来へ繋がる一言に希望が湧いてきます。

二〇二〇年度の事業は「朗読とヴァイオリン演奏」を唯一催すことができました。はじめての試みですが、関係者の方々のご協力によりCDとして皆さまと共有できるのが何よりです。故小尾俊人氏から引き継いでくださったみず書房社長の守田省吾氏は、いつもの通り誠実に淡々と目的を果たしてくださいました。津波に襲われたようななかでの『ユニテ』発刊、無事にお届けできることに感謝の念でいっぱいです。

(宮本エイ子)

編集部

守田 省吾	中田 裕子
宮本エイ子	清原 章夫
村田まち子	四宮 ころ
シッシユ・デイディエ	

ユニテ 第四十八号

発行日 二〇二一年五月十五日

発行者 一般財団法人

ロマン・ロラン研究所
理事長 西成 勝好

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

U N I T É

Sommaire

Extrait de <i>Vie de Beethoven</i>	Romain Rolland
<i>Actions de grâces à Beethoven</i>	Romain Rolland
Les trois dernières sonatas pour piano Exposé et récital extrait du programme du 19 avril 1991	Tanimichi SUGITA
Mourir en écoutant de Beethoven	Yo HAMADA
Exposé et récital «Le piano et Beethoven»	Takahiro SONODA
<i>L'histoire Jean Christophe</i> Lecture	Machiko MURATA
En lisant <i>l'histoire Jean Christophe</i>	Ikuko KONGO
Au-dessus de la mêlée	Koichi UEMATSU
Hommage à Fou Ts'ong	Masanobu NISHIGAKI
Compte rendu des activités de l'Institut Romain Rolland	
Activités et objectifs de l'Institut Romain Rolland	
Annuaire 2020 des membres et donateurs	
Postface	